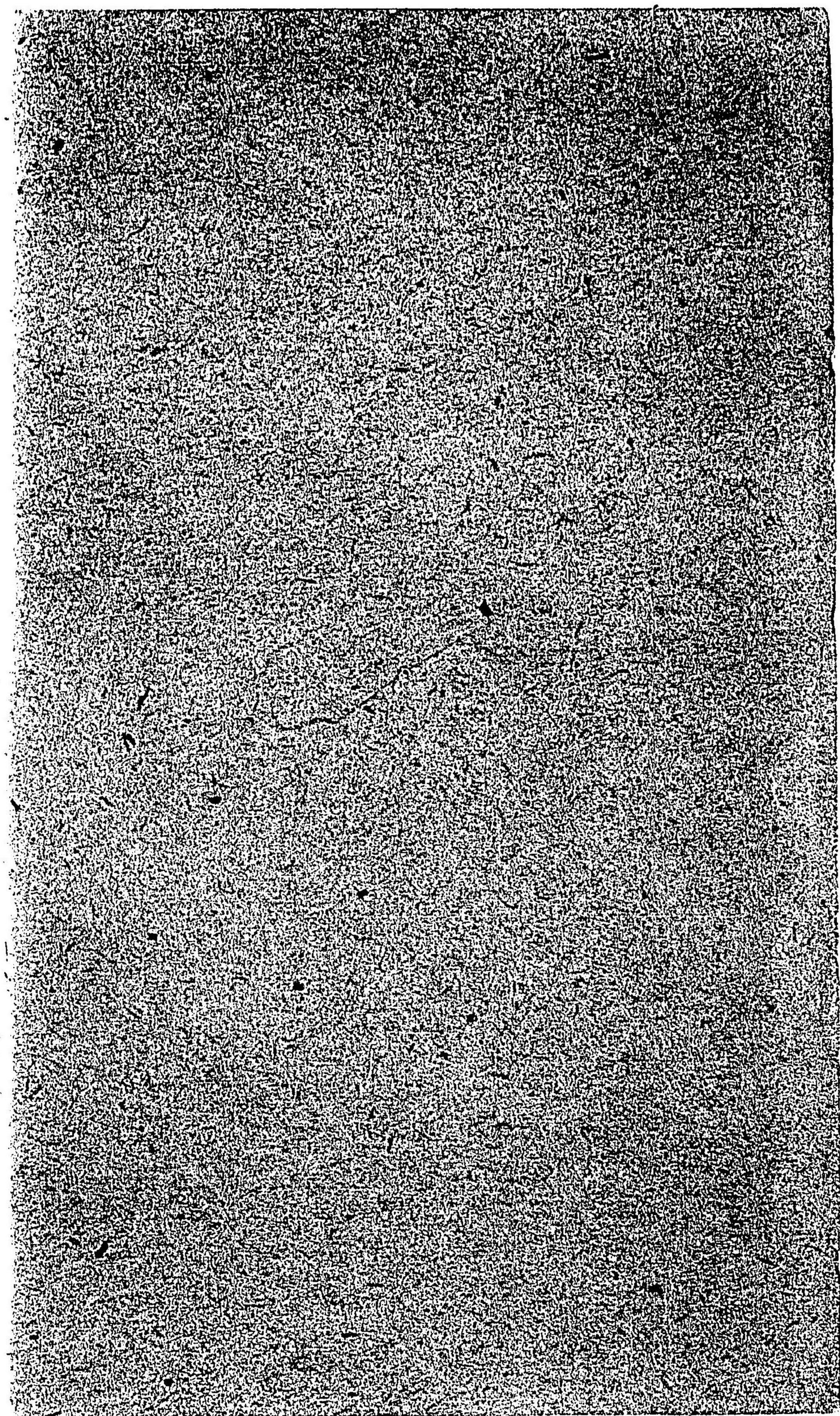


94-472

別

天	下	第	一
乃	名	勝	
耶	馬	溪	茶

馬溪茶內記



序

北豊耶馬の山水、南豊別府の温泉は共に普く人口に膾炙せる二大名勝の地區にして廣き意味に於て之れを我九州の大公園なりと稱するも不可なし而して此二勝地併せ收めて本縣に在り何ぞ夫れ縣人の多幸多福なるや諺に曰く名物に甘いものなしと此れ名産名物の其名に伴はざるを稱する也而かも耶馬溪の山水に至りては其實の却りて其名に過ぐる者あるを驚くなるべし想ふに耶馬溪の奇勝は一代の文士頼山陽已に稱して天下第一と爲す後人又何ぞ區々の蛇足を添ゆるの必要あらんや唯だ吾人の

言はんと欲する處は山陽の流風遺韻を紹き如何にして此名山水を天下に紹介すべきやにありて存す耶馬溪を天下に紹介する方法蓋し種々ありと雖も耶馬溪案内記の編纂は乃ち之れを天下に紹介し併せて耶馬觀光の客をして其趣味感興を起さしむる最善最急の手段たるを認む願ふに従來耶馬溪に關するの著書二三にして足らずと雖も其多くは匆々離落の間溪山の淵を瞥見し去り經過し來りて以て溪の全趣を捉へ得たりと爲し歸來之を筆に上して其紀行を公にせし者也固より溪の全趣を寫し得て遺憾なしと言ふべからず蓋し耶馬溪の地たる溪山十餘里村落十三村の長きに亘り且つ春夏の景

は秋冬の景と其趣を異にし山容の妙水態の奇四季各々其狀を同くせず到底其完璧を世の文士の一朝夕の觀察に望むべからざるは吾人の言を待たざる所也況んや其風致地理歴史及逸話を摺拾して廣きに涉り深きに達し其山水の奇絶と共に行客をして長に歴史的感興を起さしむるに於てをや之れを從來の著書に見る其文の巧妙は或は之れあらん而かも此れ其溪の一眉目のみ全鬚眉にあらず乃ち未だ耶馬溪の忠實なる説明者として許す可らざる也著者小川古吉氏は溪中の人なり夙に耶馬溪案内記編纂の志あり日夕耶馬山川の神靈に觸るのみならず殆んど半載の間溪山を跋涉し深く自ら得る處あ

り其耳聞せる歴史的由來及觸目せる胸中の感興を
描き來りて今秋此書を公にす予其書を見るに精透
の眼周到の觀加ふるに筆路亦最も緻密を極め案内
記としては殆ど遺憾なきに近く獨り之れを耶馬觀
光の客に便にするを得るのみならず併せて天下の
名勝を天下に紹介するものなり其勞や多く其功や
少しとせず蓋し此書一たび世に出づ又馬溪觀光の
客をして東道の主なきを憂しむる事なけん予深く
著者の用意に服す予や最も煙霞風流の癖あり年少
學生として又新聞記者としての生活を東京になし
たるの外常に地方の人となり濤聲松影隨所に詩人
となりて其痼疾を滿たせり予が文に都門脂粉の氣

緒言

凡筆を以て仙境を寫し拙劣の文を以て名山水を描
く、獨り世人の之を聽さざるのみならず或は耶馬神
靈の逆鱗に觸れんことを恐る、故に溪中の人士は耶馬
溪案内記の著作を以て仙骨ある文士に期待するこ
と久し、而して今日に至るも未だ其人の來るを見ざ
る也、輓近交通の發達と共に内外觀光の客踵を接し
て四時絶ゆることなし、而かも客として恰好の案内
記なきを歎せざるなし、予や耶馬溪口に住し朝夕其
歎聲を耳にす此れ予が案内記の急務を認めし所以

なり予豈文士其人を以て自ら任すと言はんや唯だ予が淺學を顧みず自ら筆を載せて十里の蹊中を跋涉すること殆んど半載に及び、普く十三村落の舊家を尋ね或は彦山に躋りて衣を千仞の頂に振ひ或は羅漢寺に泊して月明夜猿の聲を聽き、又之を古書俚謠に探り詩人高士に叩き以て溪山の地理歴史逸話及び先人の遺韻流風を蒐集せし所以の者は之によりて溪中人士の期待せる一代の文士の來りて筆を執るの資料に供せんと欲したれば也友人偶々予を訪ひ予の草稿を見て頻りに其上梓を促がす予未だ心動かす友人重ねて曰く然らば所謂文士の來りて

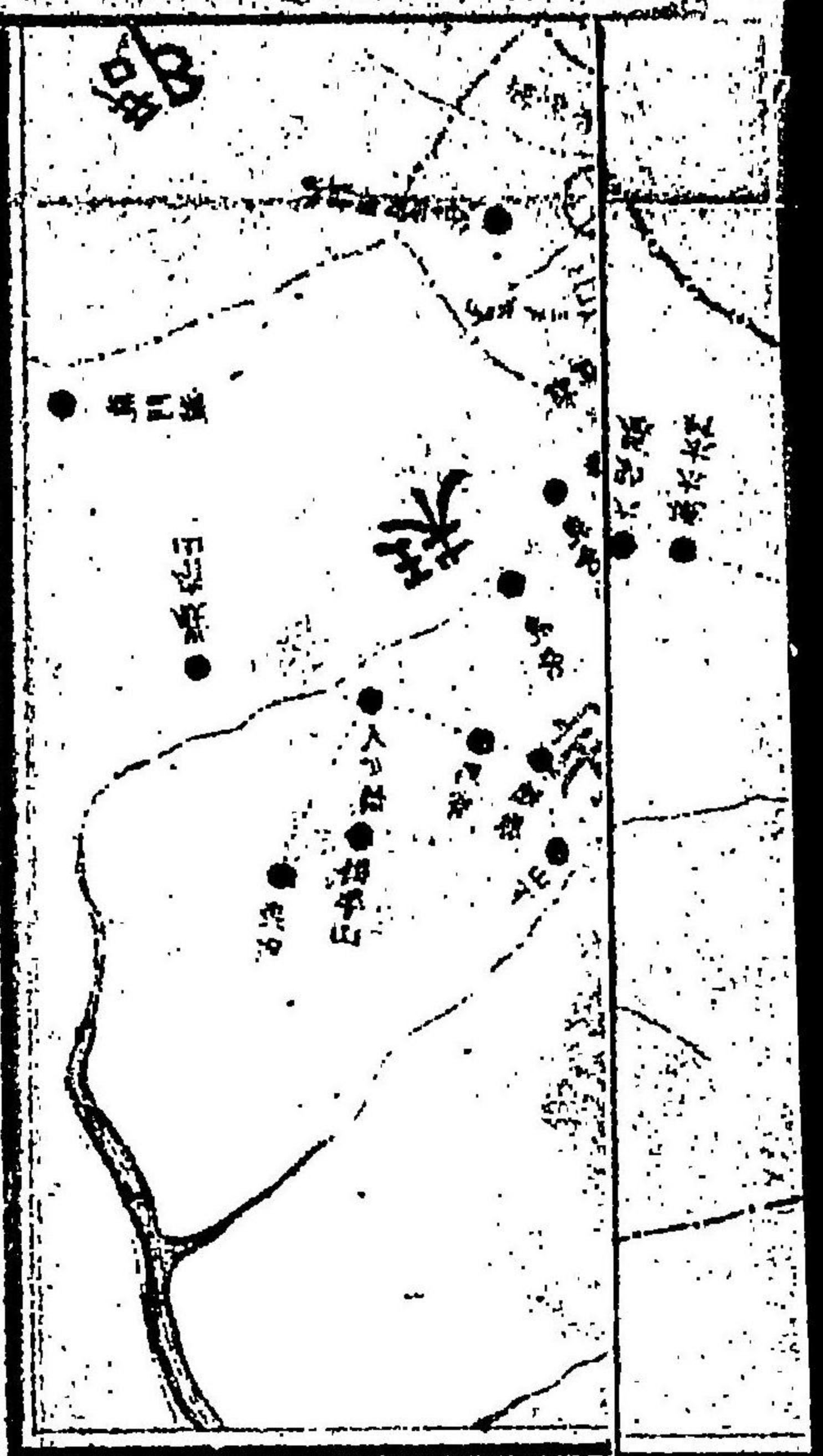
筆を執る果して何れの日ぞ如かず先づ此書を上梓し徐かに其人の來るを待たんにはと予の心乃ち初めて動く、蓋し此書や文字拙惡固より見るに足らずと雖も其記事は最も正確に期し、現に予の觸目耳聞せし處に係り自ら以て之を信する處の故に一點の浮説異論、一片の餽釘舖張を加へず、唯だ溪山の奇勝と相待つて其文章も亦た妙絶奇絶ならんことは他日溪中人士の所謂文士其人に待たんのみ、由りて一言此書の由來を記すと云爾

附言此書の蒐集に關し松田竹園、小野櫻山、二硯兄の材料を分ちて大に力を効されたるは予の最も謝す

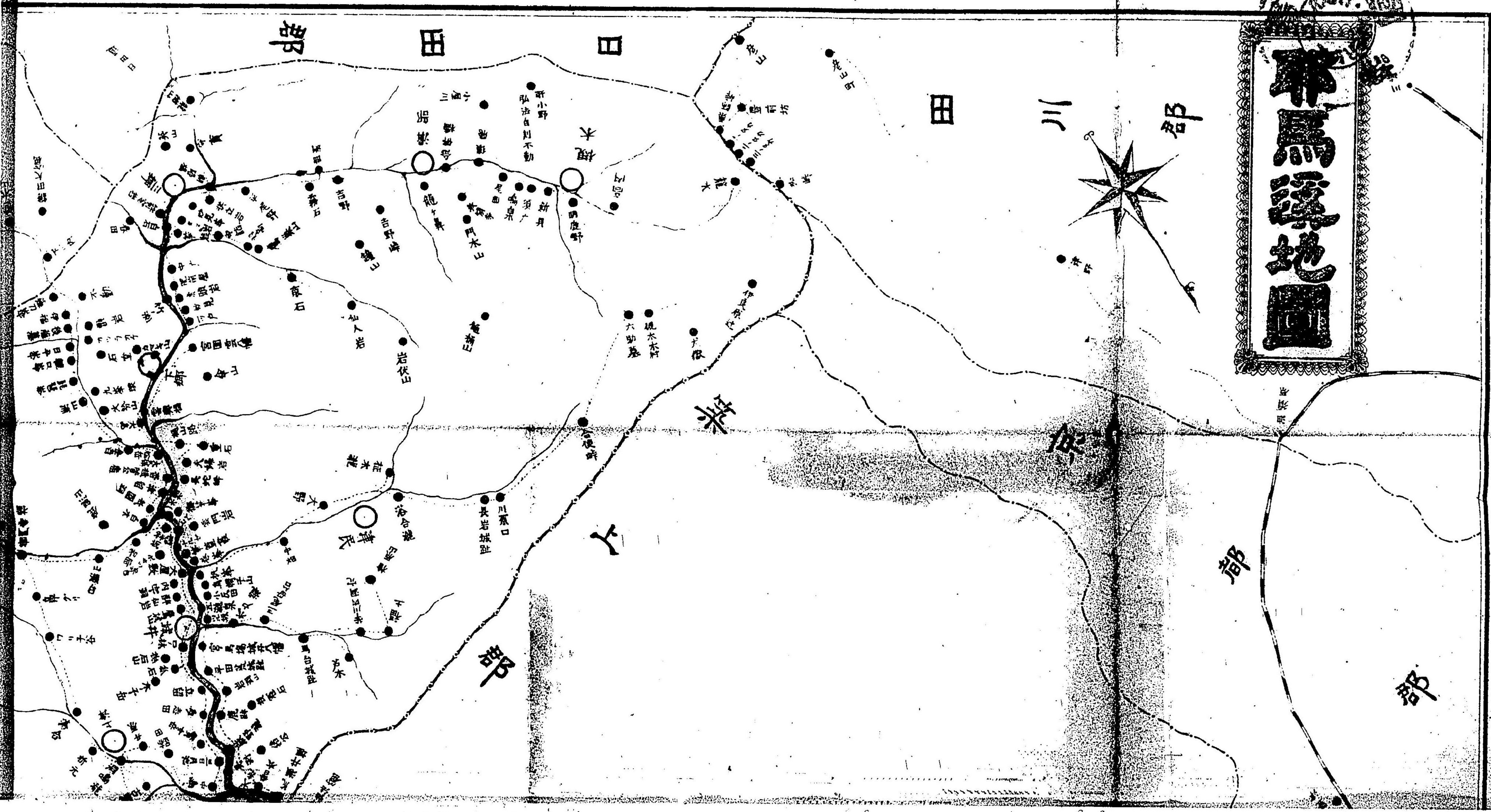
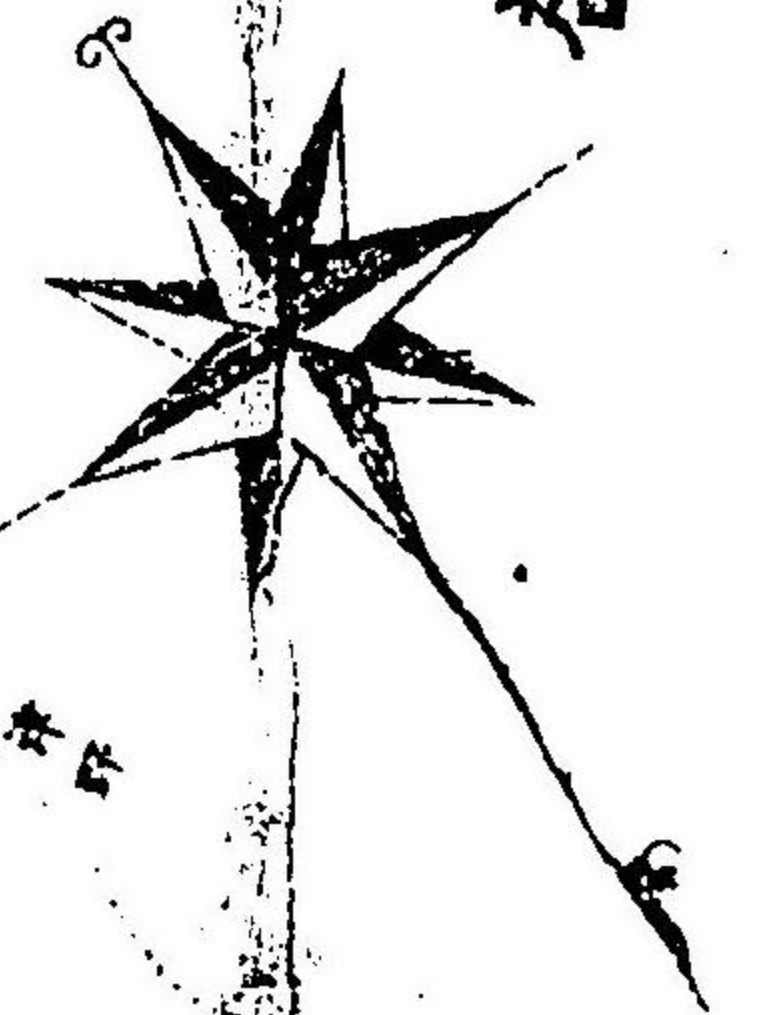
る處也

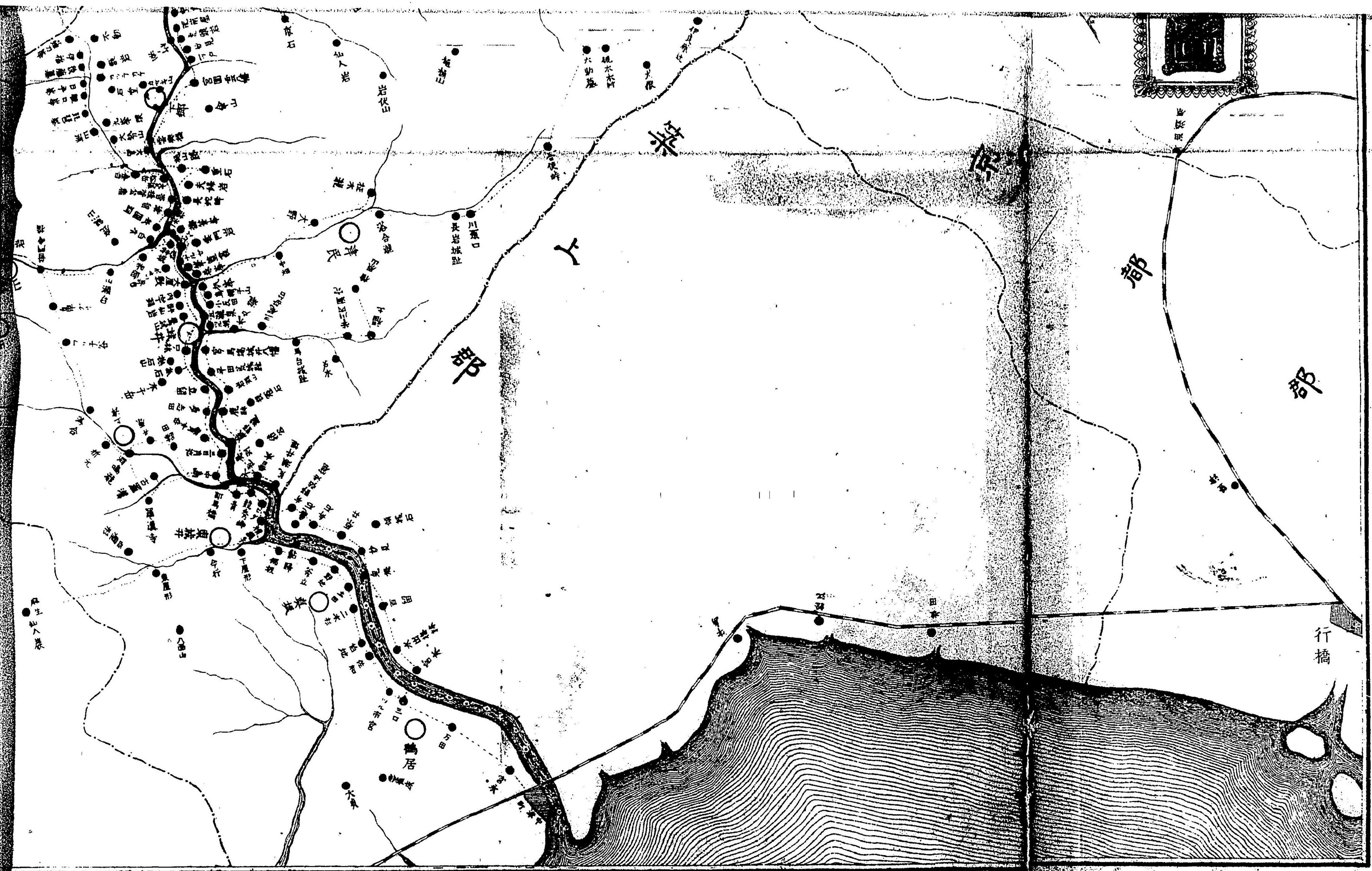
明治三十九年十月

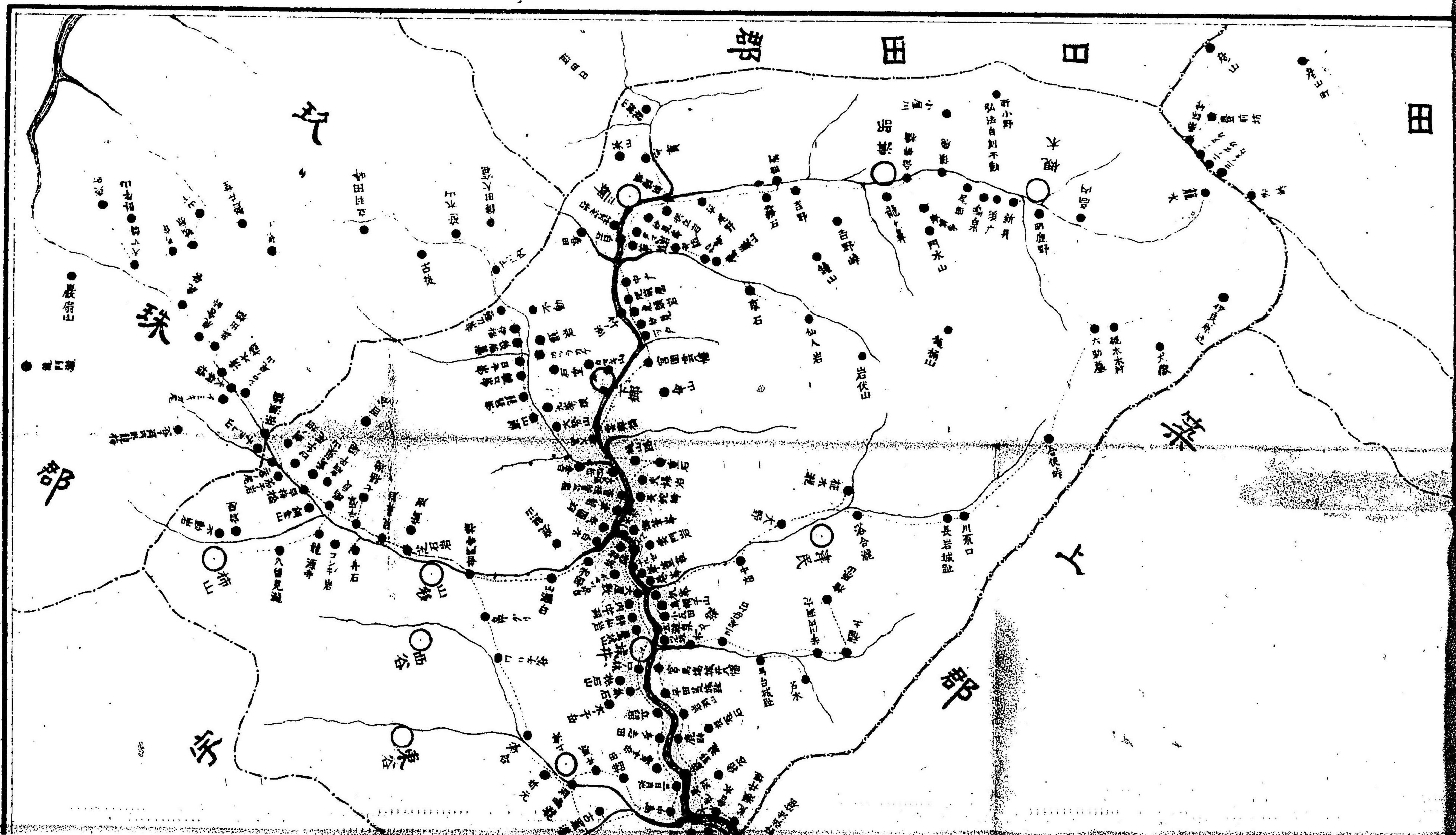
編者果仙識



本縣總地圖









● 巖宿山
● 大石

部

珠

部

部

部

東

山

西

山

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

大石

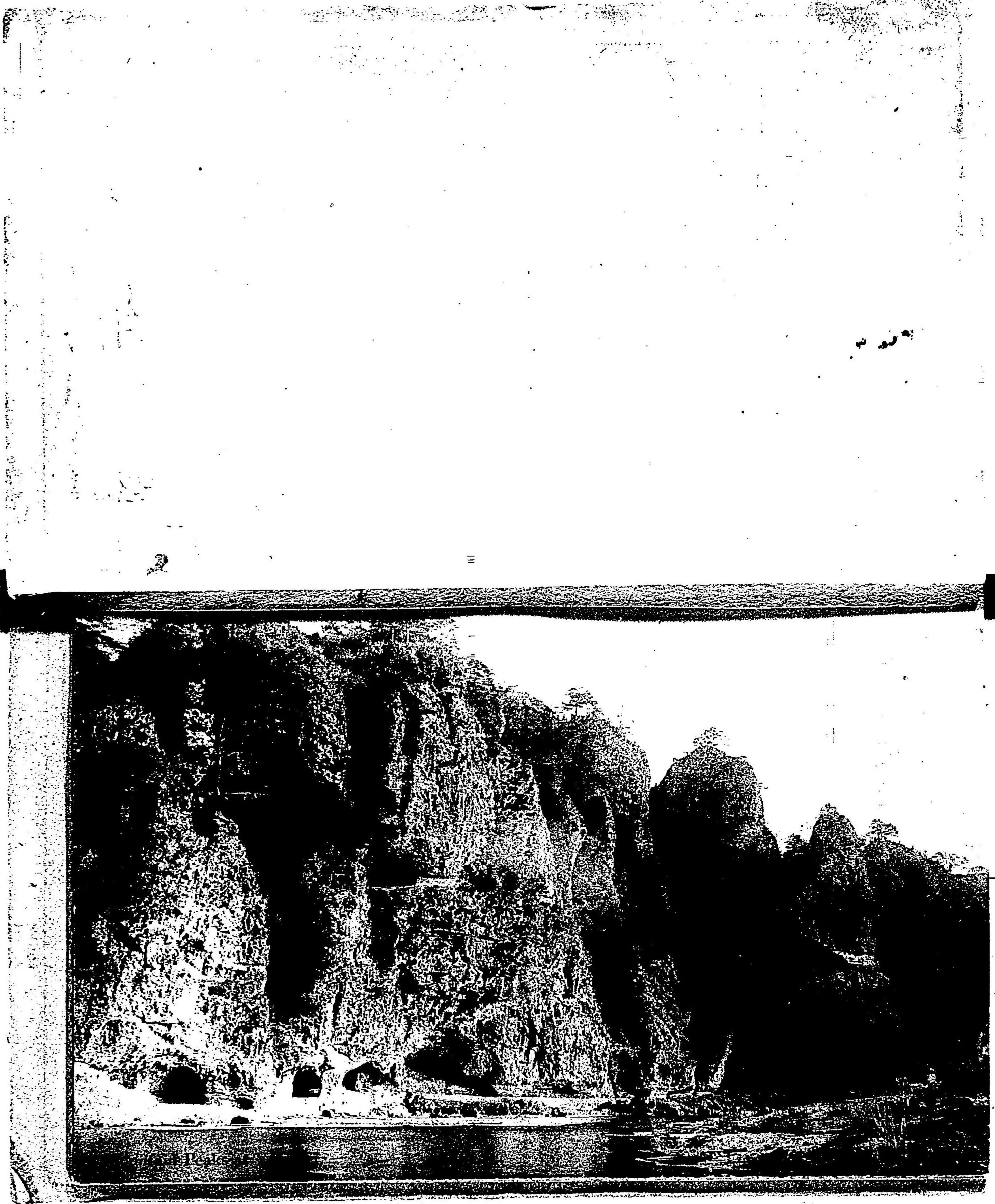
大石

大石

大石

大石

大石

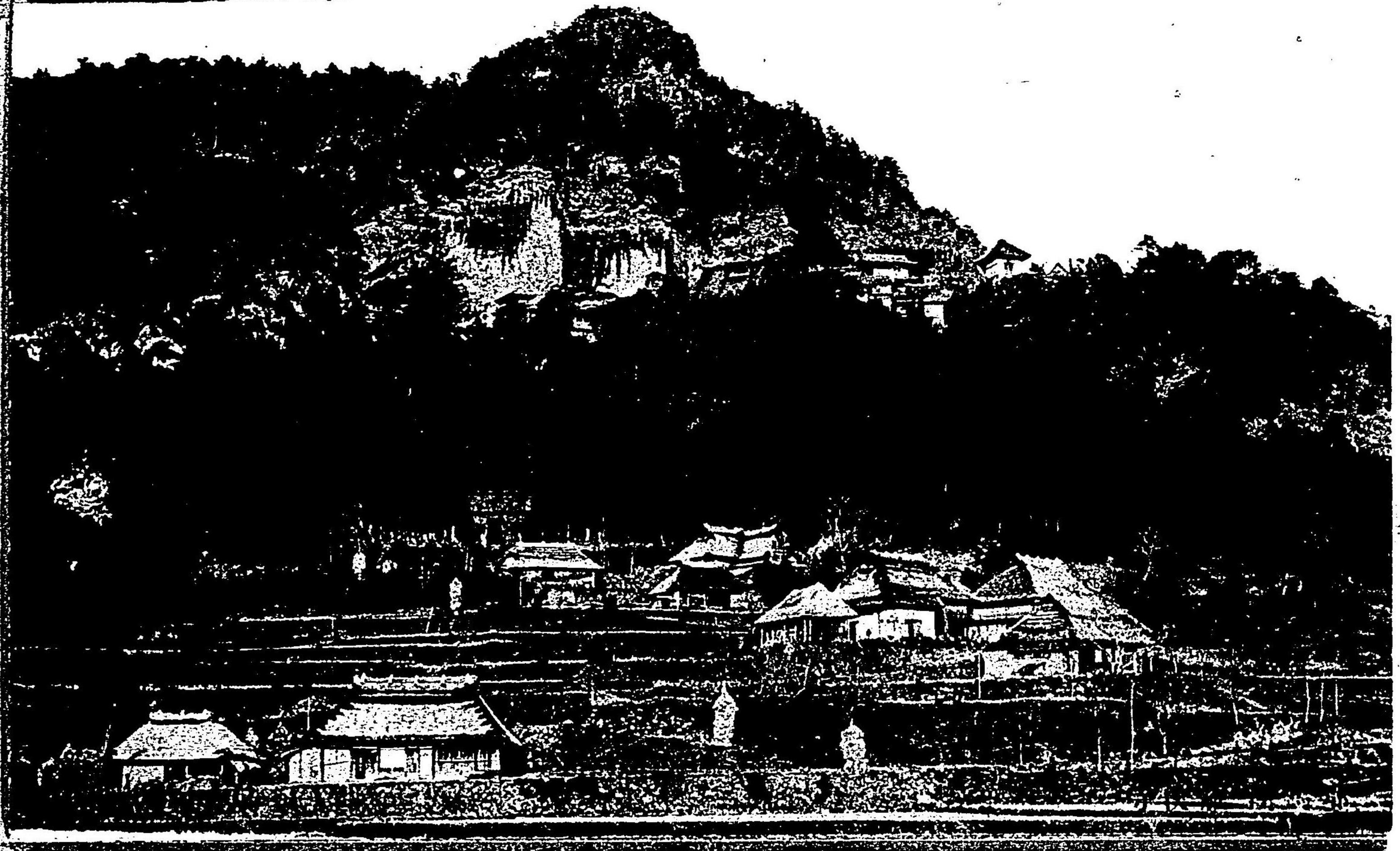


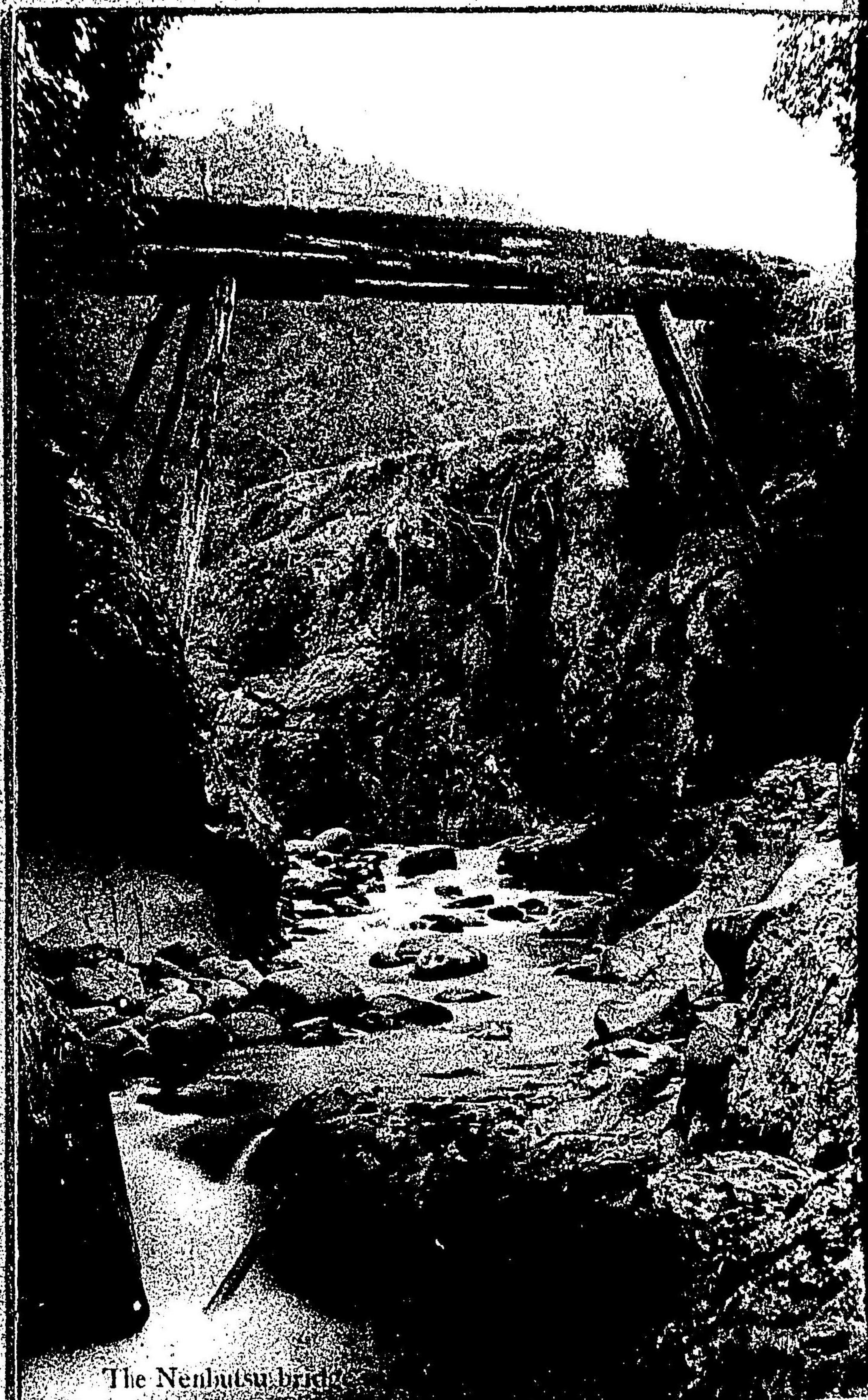
きかは便郵



CARTE POSTALE

耶馬溪内記挿郵





The Nenbutsu bridge

きかけ便郵

CARTE POSTALE

高挿記内案溪馬耶

きかは便郵

馬溪案内記挿畫

CARTE POSTALE



きかは便郵

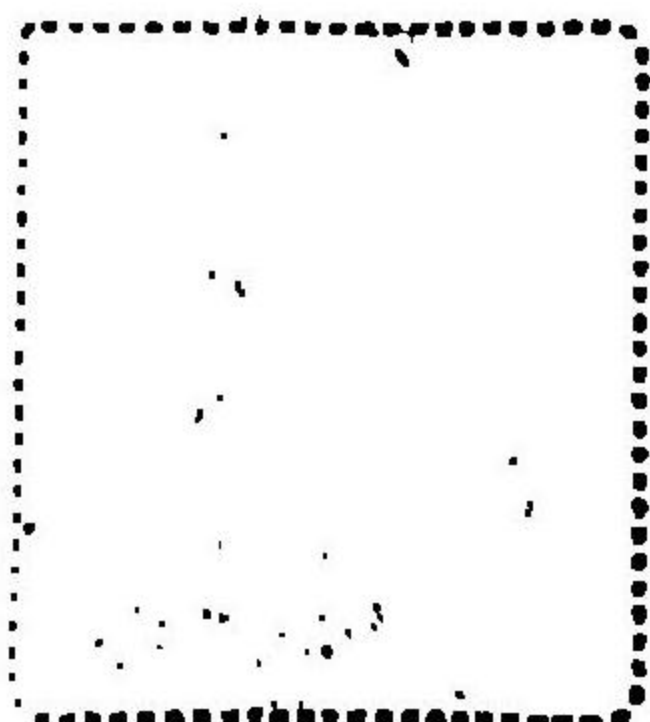
高挿記内案溪馬耶

CARTE POSTALE



特用羽立溪馬耶

きかは便郵



CARTE POSTALE

請挿記内案溪馬耶

耶馬溪案内記目次

○耶馬溪地圖	○門司より耶馬溪の順路	費時間	二
○耶馬溪里程表	第二別府耶馬溪間	○別府より耶馬溪の順路	二
○耶馬溪繪葉書コロタイ	○別府より宇佐八幡宮を	○別府より宇佐八幡宮を	二
○第一編	○豊後の温泉豊前の耶馬	○豊後の温泉豊前の耶馬	二
○第一門司耶馬溪間	○別府より耶馬溪見物消	○別府より耶馬溪見物消	三
○門司、下關、小倉より	○中津町	○中津町	四
○耶馬溪	○三口	○三口	四
○門司より耶馬溪見物消			

目次

○鶴居の八勝……………	五	○土蜘蛛……………	一四
○三口より樋田の順路……………	九	○唐原水出の梅林……………	一四
▲三口より本道通り樋田……………	一〇	○兔飛……………	一五
○真坂の洞……………	一〇	○原井妙見……………	一五
○手斧立八幡宮……………	一一	○原井七石……………	一五
○鮎歸り……………	一一	○原井花岡石……………	一六
○佛坂……………	一二	○有野弘法窟……………	一七
▲三口より唐原通り樋田……………	一三	○有野渡し……………	一八
○唐原渡し……………	一三		
○御靈石……………	一三		
○金塚……………	一三		

第二編

樋田より競秀峰前を経て羅漢寺、洞鳴瀧に至

り還て耶馬橋に出つ……………	一九	○鬼面の洞……………	二四
○樋田……………	一九	○妙見巖……………	二四
○富來瀬幽潭……………	一九	○殿巖……………	二四
○樋田にて見物者の注意……………	二〇	○双松巖……………	二四
○曾木宇洞山……………	二〇	○山陰鑿道碑銘並序……………	二五
○競秀峰附近略圖……………	二一	○禪海の略歴……………	三一
○競秀峰争流川……………	二二	○禪海に於ける口碑……………	三四
○山陰鑿洞……………	二三	○犬飛……………	三五
○杣瀧……………	二三	○青……………	三六
○惠比須巖……………	二三	○耶馬溪保勝會……………	三六
○大黒巖……………	二四	○櫻山翁と馬溪文庫……………	三七

目	次
○耶馬橋……………	三八
○中島……………	三八
○耶馬橋より柿坂方面と 新耶馬溪行順路……………	三九
○羅漢寺と洞鳴橋案内……………	四〇
○羅漢の二十四勝……………	四〇
○禪海の墓……………	四二
○智剛寺前……………	四三
○石梁附近……………	四四
○甘露泉……………	四五
○地獄極樂……………	四六
○鶴算樓……………	四七
○題字題名詩歌文章……………	四七
○羅漢寺寶物……………	四八
○澤村大學碑……………	五〇
○羅漢寺縁起……………	五一
○貝原益軒紀行文の一節……………	五三
○洞鳴橋……………	五四
耶馬溪案内記	
第三編	
耶馬橋より柿坂に至る……………	五七
○耶馬橋より本溪順路……………	五七

目	次
○上曾木長潭……………	五八
○上曾木猪谷……………	五八
○耶馬溪の一大物産……………	五九
○蕨野二日月池……………	六〇
○三個の三日月……………	六〇
○賢女岳……………	六〇
○節婦刀 <small>とじめ</small> 自賣……………	六一
○蕨野湍瀧……………	六四
○投冠石……………	六四
○九曲屏……………	六五
○八王子宮……………	六五
○耶馬溪特有物産……………	六五
○壘書巖……………	六六
○鹿跡と焼飯岩……………	六六
○篠觸梁 <small>しのふれやな</small> ……………	六七
○巖洞山と久福寺……………	六七
○蜂窠巖……………	六八
○停立巖……………	六九
○三慧山西淨寺……………	六九
○荒城……………	六九
○木の子岳……………	七〇
○御臺山、撫石山、鷹城山……………	七〇

目次 6

○戸原の八石……………	七〇	○高城山……………	七五
○城井八幡神社……………	七一	○烏帽子岳……………	七五
○口の林……………	七一	○机峰……………	七五
○口の林七景……………	七一	○机淵……………	七六
○城戸瀧……………	七三	○卷峯……………	七六
○鶴坂垂松……………	七三	○朝天嶺……………	七六
○五瀧泉……………	七三	○筆筥叢……………	七六
○大谷山……………	七四	○鴨瀨……………	七七
○鷹城山……………	七四	○菩薩峽……………	七七
○醉仙巖……………	七四	○琵琶淵の奇岩……………	七七
○内字洞……………	七五	○雲門巖……………	七七

目次 7

○柿坂……………	七八	○鹿熊岳……………	八一
○擲筆峰……………	七九	○山瀨臺……………	八一
○袂が淵……………	七九	○鼻環越……………	八二
○柿坂善正寺……………	七九	○普門寺橋……………	八二
○獨木橋……………	八〇	○芝石巖……………	八二
○鍋淵……………	八〇	○山移古代地史……………	八三
○渴貌……………	八〇	○山は地球皮殻の皺 <small>しわ</small> ……………	八三
○柿坂の三つ辻……………	八〇	○鳶巖……………	八四
第四編		○龍鼻巖……………	八四
柿坂より深瀬谿(新耶馬)		○七福巖……………	八四
を經て森に至る……………	八一	○小岳舟石……………	八五

目	次
○鍋臺の甌岩	八五
○鴨良	八五
○高平瀧	八五
○鴨良小温泉	八五
○耶馬溪山の陰陽	八六
○深瀬谿(新耶馬)	八六
○谷の河内臥龍梅	八六
○天女橋	八七
○森町	八七
○三島宮	八七
第五編	
梯坂より大島に至る	八九
○祇園橋、祇園洞	八九
○長蛇峰	八九
○覗石 <small>のぞき</small>	九〇
○沓掛菅公廟	九〇
○夫婦岩	九〇
○樋山路淨真寺	九〇
○讓葉 <small>ゆづりは</small> の蒸石	九一
○大久保の松岳	九一
○大島雲輿橋	九二
第六編	

大島より伊福を経て 森町に至る	九三
○緒言	九三
○伊福谿の山貌	九五
○石堂谷	九五
○後藤基次碑	九五
○鎌田の大窟	九六
○立羽田峰	九七
○立羽田の八岩	九七
○坂上峯	九七
○磐井堂	九八
第七編	
大島より中摩を經、羽 高支谿を往復して守實 驛に至る	一〇一
○雲八幡宮	一〇一
○一戸妙見嶽 <small>ひとと</small>	一〇二
○山下	九八
○鶴原	九八
○神仙の有無	九九
○馬脊障子巖	九九
○丸坪	九九

○ 江戸橋頭……………	一〇三
○ 縣下第一の大杉樹……………	一〇三
○ 神谷橋……………	一〇三
○ 竹淵の紅葉……………	一〇三
○ 路傍の清泉……………	一〇三
○ 虎頭巖……………	一〇四
○ 龜山神社……………	一〇四
○ 肥前屋……………	一〇四
○ 天神橋……………	一〇四
○ 羽高……………	一〇四
○ 鷹巢山……………	一〇四
○ 京石……………	一〇五
○ 仙人巖……………	一〇五
○ 箏巖……………	一一〇
○ 妙見峰……………	一一〇
○ 環巖……………	一一〇
○ 小温泉……………	一一〇
○ 白石……………	一一〇
○ 箭間巖……………	一一一
○ 拱立巖……………	一一二
○ 朝陽橋……………	一一二
○ 英松及英姫墓……………	一一三

○ 龍樹山の古刹……………	一一三
○ 守實驛……………	一一三
第八編	
守實驛より彦山に至る	一一五
○ 霧石……………	一一五
○ 吉野の曲淵……………	一一五
○ 鐘山……………	一二五
○ 弘法大師自刻の不動尊……………	一二六
○ 念佛橋……………	一二六
○ 教順寺……………	一二七
○ 猿飛……………	一二七
○ 門の木山……………	一二八
○ 金坑……………	一二八
○ 鳴泉……………	一二九
○ 須磨の紅葉……………	一二〇
○ 蛇淵……………	一二〇
○ 柚の木……………	一二〇
○ 新貝……………	一二〇
○ 明鹿野……………	一二〇
○ 高内……………	一二一
○ 耶馬溪山の黛眉紅葉……………	一二一
○ 籠水……………	一二一

○藥師峠……………一三三

○彦山豊前坊社……………一三三

○官幣中社英彦山神社……………一三三

○彦山神社略由緒……………一三三

○奉幣殿……………一三四

○銅華表……………一三四

○高住社……………一三五

○玉屋神社……………一三五

○材木石……………一三六

○八龍寺……………一三七

○三谿……………一三七

○四巖……………一三七

○其他の諸勝……………一三七

○彦山町より各地里程……………一三九

第九編

彦山より槻木村及津民谷
を経て大屋敷に至る……………一三一

○柳峠……………一三一

○伊良原の辻……………一三一

○槻木村……………一三二

○毛谷村六助墓……………一三二

○槻木の空洞に宿る……………一三二

○六助宇洞……………一三三

○合使峠……………一三三

○長岩城趾……………一三三

○鷹巖……………一三三

○落合飛泉……………一三四

○榎木飛泉……………一三四

○耶馬溪大觀の好位置……………一三四

第十編

城井村福土支谿……………一三七

○城戸瀧……………一三七

○三尾母臺……………一三七

○馬臺城趾……………一三七

○蘆木山……………一三七

○芋川内洞穴……………一三八

○檜原山……………一三八

第十一編

○耶馬溪名稱の起原……………一四一

○頼山陽耶馬溪圖卷記……………一四二

○小野寺鳳谷、西遊日
録……………一五〇

○梁川星巖耶馬溪絶句……………一五三

○名家絶句……………一五五

○末廣雲華の小傳……………一五七
○頼山陽の逸話……………一五七

○附記表謝

耶馬溪案内記目次終

營業目

內

書

籍

文

房

具

樂

器

類

體

操

用

理

化

學

用

器

械

豐前中津

梅

津

書

店

戸早春邨先生題字包装入
東京 小川 一真製版

耶馬溪繪葉書

前編十景
後編十景

弊店主自ら溪中を跋渉し寫し得たる奇景絶勝を撰抜して之を小川一真氏に囑し同氏の妙手に成れるものなり紙質の善美と印刷の鮮麗なる敢て贅せず幸に一部を座右に供せよ

豊前中津京町二丁目

發行本店 里屋紙店

(甲の二)

弊軒儀

永年顧客各位の御引立を蒙り難有仕合に奉存候爾後一層勉強仕り出来得る限り御客様の御便宜相計り可申上候間何卒倍舊御愛顧の光榮を賜り度伏て奉希候再拜頓首

豊前國下毛郡中津町

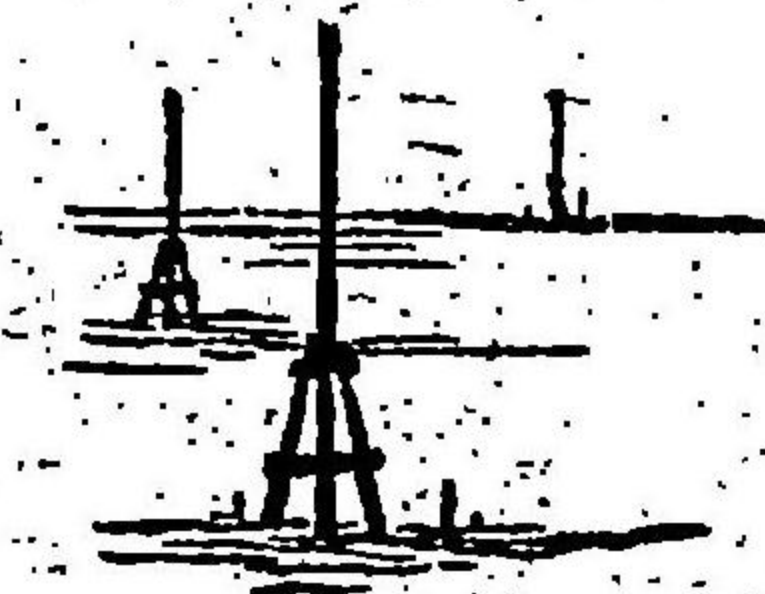
御旅館松風軒



(甲の三)

〔強勉大賣小卸〕

耶馬溪繪葉書



豐前中津諸町廿二銀行前

廣津商店

(甲の四)

豊後別府温泉場

日名子旅館

庭内小持切の温泉四ヶ所あり

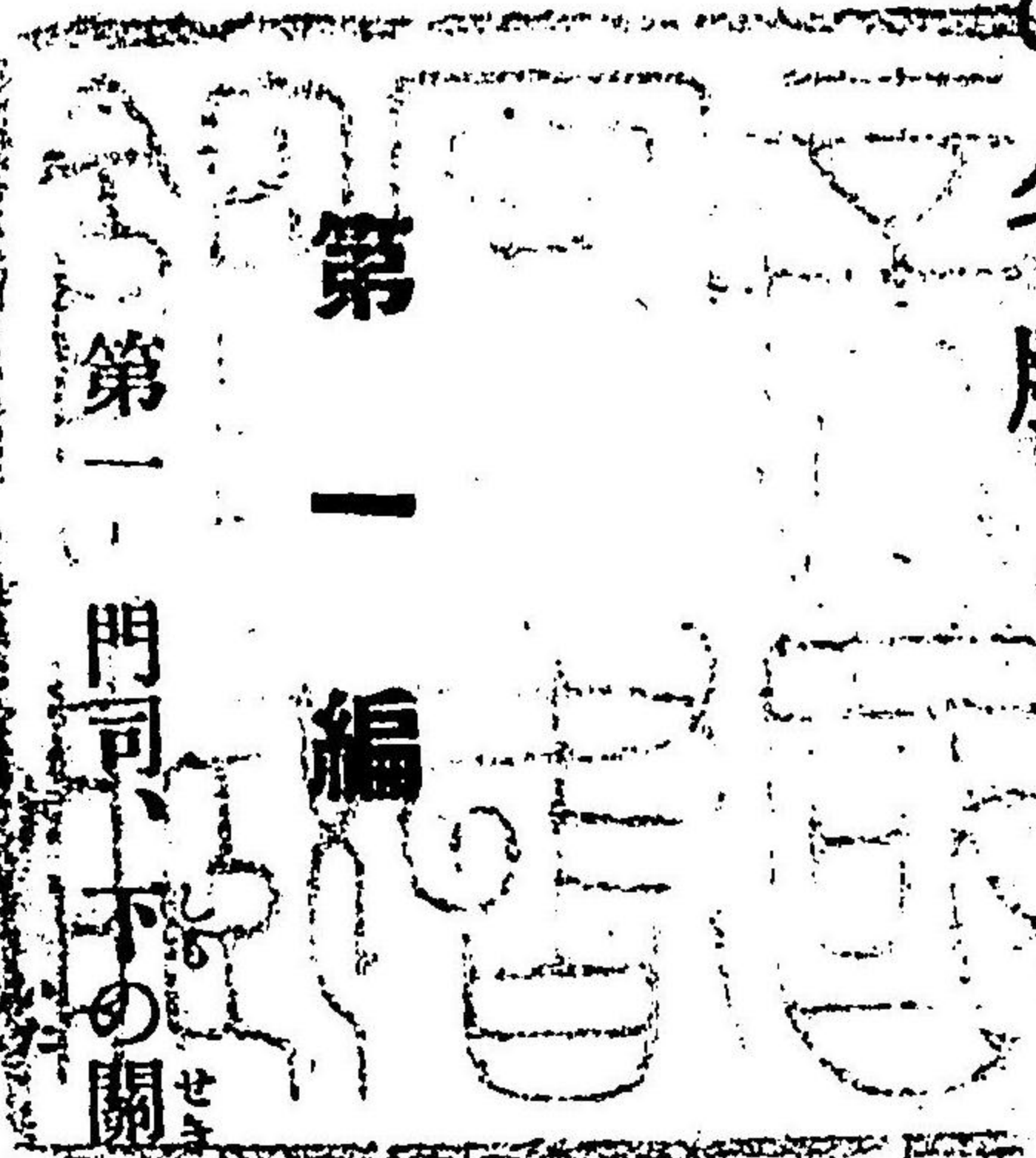
天下第一の勝地 耶馬溪案内記

仙果園主人著
長華汀校閱

第一編

第一門司、下の關、小倉は耶馬溪に入るの門戸、今門司を起點とし耶馬溪見物消費時間の概要を見るときは左の如し

○門司、下の關、小倉は耶馬溪に入るの門戸、今門司を起點とし耶馬溪見物消費時間の概要を見るときは左の如し



溪樋田に至る

小倉より中津に至り更に耶馬

○門司より耶馬溪見物消費時間

- 一最急行は一日にて羅漢寺まで往復し得
- 二急行は二日にて深瀬谿まで往復し得
- 三通常は四日にて草本の猿飛まで往復し得
- 四周遊は一周間を要す

○門司より耶馬溪行は汽車(二等壹圓拾錢 三等五拾七錢)にて中津驛に至り下車す

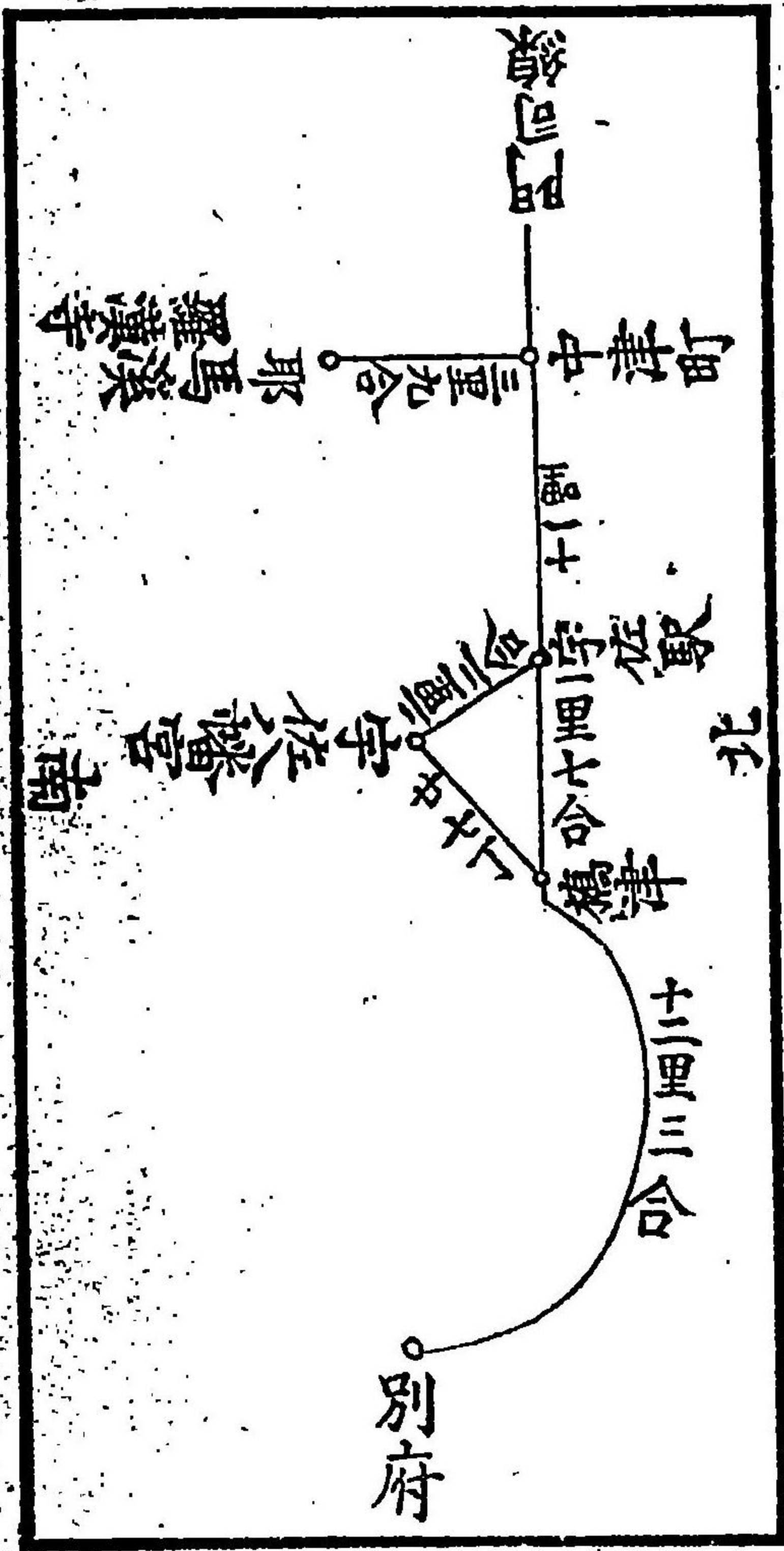
第二 別府より宇佐八幡宮を經、中津に至り更に耶馬溪樋田に至る

○豊後の温泉、豊前の耶馬溪、もとは是二豊の二名勝、而して其距離甚だ遠はからず且つ有名なる宇佐八幡大社の中間に鎮座せらるゝを以て、二者の遊客、四時相來去して止む時なし之れ遠來の客は地の理に於て自から然か遊ばざるを得ざるに出

るなり今其消費時、里程、車馬賃、及順路を見る時は左の如し

別府より宇佐八幡宮及中津町を經て耶馬溪見物消費時間

- 一最急行は二日にて羅漢寺まで往復し得
- 二急行は三日にて深瀬谿まで往復し得
- 三通常は五日と草本の猿飛まで往復し得
- 四周遊は八日を要す



○別府より橋津まで 定期馬車賃 六拾六錢
人車賃 壹圓四拾錢

○宇佐八幡宮より宇佐驛まで 馬車賃 拾壹錢
人車賃 貳拾貳錢

○宇佐驛より中津まで 汽車賃 一 等 三拾五錢
二 等 拾八錢

○宇佐驛より別府まで 定期馬車賃 七拾五錢
人車賃 壹圓五拾錢

○中津町 黒田、細川、小笠原、奥平、歴藩の城趾あり丸山城亦
大家城と云ふ地形により亦扇城と云ふ現今戸數約貳千六百、
二豊の商業地を以て名あり中津公園(舊城趾)闌無濱、大江八

幡等は此地の名勝なり

○三口(又大井手と云ふ)堰の口三つに別る西の口より發する
ものを金剛川、東の口より發するものを柳川と云ふ其中流は
即ち中津町の飲料に供用する水道なり

○鶴居の八勝

一大井手、沖代千餘丁歩の田園を養ふの根源たり

昔時此井堰、洪水ごとに流潰せられ農民の困苦云ふべか
らず崇徳帝の保延元年土地の地頭七人打寄りて救護の策
を講じけるに湯屋彈正議を建て曰く人柱を以て堰を築く
ときは決潰の憂なしと古人の傳ふることあれば今吾々の
内一人命を捐て其難を救ふ又仁義の道にあらずやと、衆

之を然りとし闇に交ふるに各袴を水に没し先づ其沈みたるもの死すべきを約す、而して彈正の袴先づ沈む、其家臣古野源兵衛の女に鶴なるものあり彈正に請て曰く妾等數世恩顧を辱ふす今君の死を座視するに忍びず願はくは妾が身を以て代らんと其子市太郎僅に十三歳紅涙潸然彈正の前に進で曰く兒幼なりと雖又一個の男子なり若し君母を殺さば世人兒を怯となさん願くは兒が命以て君に代らんと遂に保延元年八月十五日母子水底に沈み人柱となれり是より井堰全く堅固にして百世民人の生を安んずるに至るそれより親子の名をとり鶴市宮と號し水道守護神として坂手の隈に祀る

二浮石(井堰の中央にあり)口碑に云ふ井堰増水するも減水するも其露出せる部分に多少を生せずと、一説に此石洪水のとき若し潜匿するときは水難の兆なりと二神の遺言せられたるに因り計石と稱すと、又此石上に酒壘の形状を印しあるは鶴市二神人柱となりしとき訣別せし事蹟を留めしものなりと云ふ

三神の木(三口の東一丁にあり)二神人柱となるとき其頭鬢を納めて墳墓とせし地なり老棕樹幹枝蟠蜿太古の觀を呈す

四腰掛石、鶴市宮境内にあり二神人柱に立つとき八百萬神を遙拜して石上に御腰をやすらはると

五小島崎 鶴市宮より南三丁の河畔にあり、二神人柱に立つとき七人の地頭袴を水中に投せし舊蹟

六龍馬石(一名三つ石)小島崎と相接す、耶馬溪八石の一人、昔加良須男人なるもの或夜速秋津彦神速秋津姫神此石上に於て龍馬に跨りて出現し給ふと夢み異みて至り見るに果して二神威光儼然として現れしより奉迎して小島崎に祀り貞元二年九月朔日今の鶴市宮に合祀す

七鶴居の七本櫻 二神人柱に立つとき七人の地頭、各一株宛紀念の爲め手植せしものなりと傳ふ

八鶴居山 山頂平野あり耶馬溪末流の眺望臺とも云ふべくして北は閻無濱、大江岡、吹出濱を隔て周海の白帆、西は

久菩提山經誦岳犬ヶ嶽刈股山檜原山松尾山、門司地方の遠山、東は豊後富士、南は近く八面山、木の子岳、臥牛山と耶馬の峰巒を望み、眼下耶馬溪流の來て蒼々たる一帯の廣淵を舗き桃花水暖なる所數葉の輕舟競技するを見る

山上より最も明快に見ゆる八面山は一名を美人山と云ふ山の中央より少し右に當り瀑泉の懸るを見る、地方の青年笈を負ひ遠遊するや先づ此山と瀑泉に潔齋し志業ならされば再び相見えざるを誓ふと云ふ

◎三口より樋田に至るの行路二あり一は本道より一は河を渡り唐原村(福岡縣築上郡)よりす、此間の景勝は唐原村に多く

本道筋に少し故に往路は唐原村にとり歸路は本道にとるべし
但し車馬にて急行見物者は本道を往復するを可とす
今案内者は便宜

一三口より本道を経て樋田に至る
二三口より唐原村を経て樋田に至る
の二様に分ち案内す

▲三口より本道を経て樋田に至る

○三口より佐知、泊地、二本杉、土田、野地(名物野地饅頭)を経て

○真坂の洞 路左真坂池に臨める東方の山上、老松七八株挺立せる處に古石祠孤立し、祠邊洞穴ありしも今は祠を手斧立

神社境内に遷し洞穴は埋滅に歸しぬ、古來手斧立坂下の嵐は此洞穴より出づと傳ふ

細川家臣

豊國の真坂のほらの青嵐心してこけ沖の舟人

日野大納言資枝

御薪に備ふる妻木おひつれて真坂のほらを出つる山かつ

○手斧立八幡 宇佐宮第三殿造營のとき此社内なる楠の本

にて杣始の式ありしに因り此名あり

河西に巍然たる原井、臥牛山の牛角高く双立する状を監視するは此處を好位置とす

○鮎歸り 河畔數丁歩の間、犖确紛錯せる大磐石を鋪き其峭

壁より急湍跳唬碎激して深淵に入り逡巡怒を斂めて趨り去る
此處は通路より數丁を隔て見下すを以て未だ其真趣を盡さ
れども若し道を下り急湍に接近するときは踏む所の奇岩は愈
奇にして急湍深淵は心を駭かし目を眩するに至るべし、蓋し
鮎歸りの地名は鮎の急湍を浜る能はざるに出づるなり

○佛坂 斷崖削立して道を壓し危岩將に頭上に墜落せんとす
る處五六の人家を構へ崖前、溪流の清潭あり山光樹影相掩映
して妙美を極む、之より右折形田橋を涉り二丁にして右方の
河畔に突出せる龍が鼻の奇岩を見る又二丁にして樋田に入る

一本田親雄

ほとけ坂こえつらみれは名に似す鬼の住むらん岩屋なり鳧

▲三口より唐原村を経て樋田に至る

○鶴居河原の唐原渡し 是即耶馬溪流にして源を英彦山の靈
水たる籠水に發する山國川なり此渡し増水のとくに限り舟を
用ゐる常時は板橋となせり橋賃渡舟賃五厘壹錢

○御靈石 下唐原の山麓、新貝庵にあり、菅原道實公筑紫より
宇佐神宮に參詣の途次まばし御腰を休められ民情を問はせ給
ひしと

○金塚 下唐原の山上にあり古代上流人穴居の遺蹟と云ふ其
數殆ど百ヶ所、塚の構造は大石を以て箱狀となし一方の口
開けたり其内最大なるもの三個、各廣さ四坪以上の大石より
成れり

○景行天皇 御討征の土蜘蛛は豊前京都郡(昔の長狭縣)青龍窟に住せしと云へるが唐原村の金塚、百穴、宇野の石窟、柿山の洞穴、鎌田の大窟などは歴史家考古家の攻究すべき資料に屬す

○下唐原水出の梅林 路左一部落の屋前屋後に散在するもの數百株皆幾百年を経たる老木にして瓊枝清瘦、吟魂を衝く、今瀬與市氏宅後の一株は其周九尺幹枝蟠屈すること正しく一畝貳拾歩に達す本村菅公の事蹟數多ありと雖も録するに違あらす

白樹梅華古渡村、風光自是別乾坤、數家埋在香雲裡、
花不桃花亦洞源 富岡鐵齋

○上唐原の兎飛 是耶馬溪の奇勝を見るの發端なり溪中三飛の勝と稱し兎飛、犬飛、(二名犬走)猿飛なるものあり而して其一飛の勝是なり、河の兩側より深淵を隔て奇岩突兀相逼薄して數尺に陝まりたる所兎相飛びかふと云ふ

○原井妙見宮 路左に華表あり本社は絶壁の半空に懸り眺望絶佳なり

○原井七石

一傾城石 原井より友枝村に越ゆる山頭の路傍にあり耶馬溪八石の一にして昔京都より娼婦、情夫を慕ひ來りて此石に化す石上男登れば小兒にても動搖し女子なれば動かすと云ふ因に記す肥前松浦郡天童嶽に佐用姫の化せしと

云ふ望夫石あり

廣瀬淡窓

美人何所在、幽石白雲迷、一夜聞環珮、珊々落月西

村上佛山

松浦山頭一石横、千秋留得望夫名、芳魂飛渡西冥水、月裡佩環珊有聲

二龜石 字有野の北端田圃の中うちにあり途上より見ゆ手足頭

尾耳目完備す、而して毎日旭日の出でんとするときは其

首東に向ふと云ふ

三双子石 四響石 五鏡石 六船石 七鐘石

○原井の花岡石 河畔より山上さんじやうに至るまで數多の花岡石散布

す現時運搬不便にして採收するものなしと雖も世の文明と共に他日石材の需用増大せば一の供給地となるに至るべし

○有野弘法窟 有野の上端路右一丁にあり窟の廣さ四拾坪小堂あり弘法大師を安置す、窟の額、障子狀の處に數行の墨蹟あり昔弘法大師、樋田より投筆して文字を書したるものなりと又文字より七八尺上の巖面に大師半身の像を天然に描出す、樋田横繩手より望觀し得

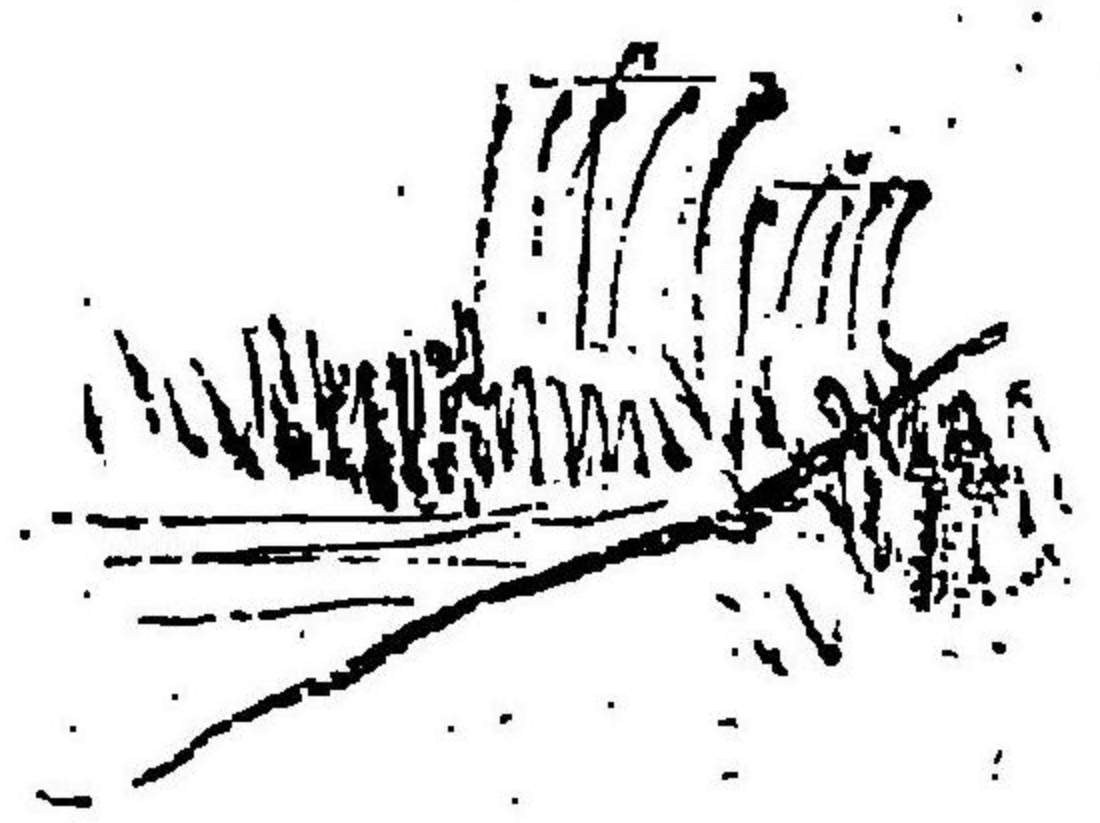
小笠原長勝

投筆のすさひゆかしく岩の面に盡せすみゆる水莖のあと

岡鹿門

宛然石屏風、修長還屈曲、丹青不可描、苔色天然綠

○有野渡と果物 平常は板橋にして増水の時舟を用う橋賃
舟賃五厘一錢
渡場の附近に仙果園あり内外の珍果樹を蒐集栽培して四時果
物の絶ゆることなし杖を植て渴を潤し給へ



耶馬觀光紀念

○耶馬溪槭苗 一本拾錢

○耶馬溪梅苗 一本七錢

○耶馬溪櫻苗 一本七錢

仙果園

豐前國下毛郡耶馬溪樋田

園主 小川古吉

仙果園養成苗木概目

○柑橘類	○柿類	○洋桃類	○苹果類	○梨類	○洋梨類	○枇杷類	○柘榴類	○實梅類	○栗類
一本四錢	同四錢	同四錢	同參錢	同四錢	同五錢	同五錢	同四錢	同四錢	同四錢
○無花果類	○李杏類	○スグリ類	○公孫樹	○花梅類	○花櫻類	△其他内外の珍果樹網羅して漏すものなし			
一本參錢	同參錢	同參錢	同參錢	同五錢	同五錢	△四時時候の果實を販賣す			

(2611)

△專門寫眞 △耶馬溪繪葉書
 △耶馬溪名産陶器 △耶馬溪繪葉書
 △名士直筆耶馬溪書畫扇面葉書
 △名士の耶馬觀光紀念揮毫を歓迎す
 △紀念耶馬觀光印押捺
 △耶馬溪案内記大取次

樋田 熊谷耕雲堂

(2611)

種田 **天幸閣旅館** 幸屋事

○耶馬第一の奇勝競秀峰に接近す

○舟遊には競秀絶壁の下まで潭水連接す

○羅漢寺へ十餘丁柿坂擲筆峰へ三里

○耶馬溪案内記○耶馬溪寫眞○耶馬溪繪葉書

○名産羅漢飴○名産卷柿○大勉強

耶馬溪案内記

第二編

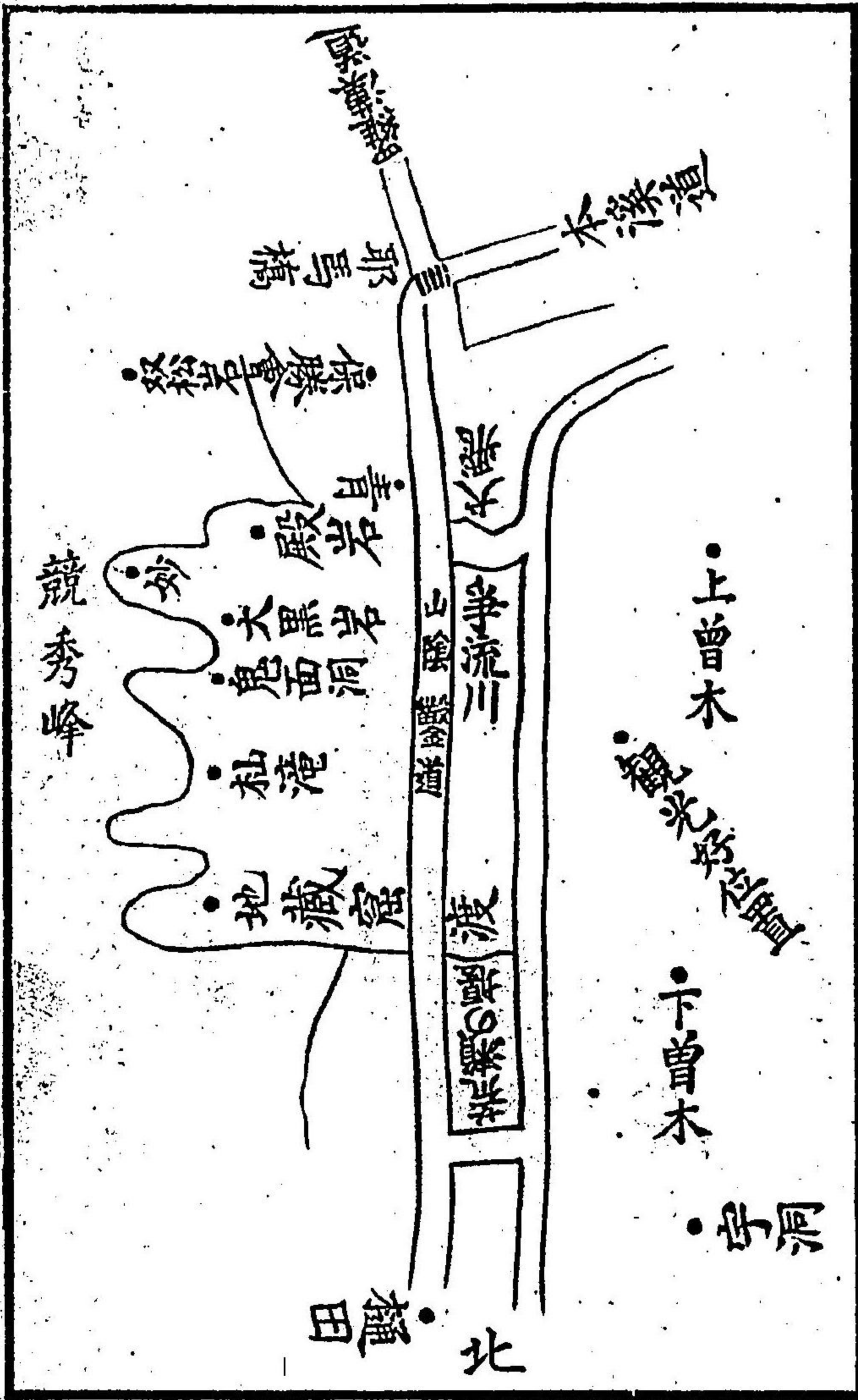
樋田ひだより競秀峰前を経て羅漢寺らかんじ、洞鳴瀧どうめいたきに至り、還かへりて中島なかじま(耶馬橋)に出づ

◎樋田ひだ 舊宿驛地にして郵便局ゆうびんきょく、銀行、酒造家、二三の旅舎りょしゃ飲食店いんしょくてん雜貨店ざっかてんあり

○富來瀨ふくろせの幽潭ゆうたんと寶坂たからざかの瀧たき 樋田ひだの西方せいほう一丁餘いちちやうよにあり富來瀨の幽潭は寶坂巖たからざかの絶壁ぜつぺきを以て覆おほひ雨中雨後に於て百尺巖頭しやくがんとう三流りうの瀑泉はくせんを懸く、潭中荦岩たんちゆうらういはと稱する岩礁がんせう突出とつしゆつせし所深さ三十

三尋と注せられ傘大の大龍潜匿すと云ふ
 ◎樋田にて見物者の注意を要するは競秀峰の絶景と犬走りの奇勝を見るため樋田より荒瀬井堰を渡るか又は本道を二丁計り上りて洞門の入口より渡舟に乗るかかの二途より河向ひの會木に至り河畔を浜り山陰鑿道(洞門)は歸途に通行すべきときはなり、若し本道の洞門のみを一過して向岸を行かざるときは遂に其絶勝を觀る能はざるべし
 故に車上来て來る人は樋田驛若くは荒瀬井堰の傍にて下車し車をば青の原の犬走りの渡り上り(向岸よりする道の本道と出會ふ所)まで行かしめ其所にて待合はさしむべし
 ○曾木宇洞山の深邃なる景色は樋田上端の途上よる觀るを

競秀峰附近略圖



可とす

○競秀峰 爭流川(記文後に出)は耶馬溪中著名の一大絶勝にして斷巖雲際に崖罅累峭して奇狀を争ひ脚底争流の水を湛ふ

競秀峰

金龍敬雄

疑是山陰道上行、天邊彩翠映河明、箇中應接真無暇、

爭流川

同

爭流之水彥山來、長峽高灘聲激雷、千丈龍蛇起河岸、往來偏賴五丁開

山陰鑿道

同

磐石鑿通數里程、往來並騎洞中行、成功儘說似神禹、

宜勒千秋不朽名

○山陰鑿道 又洞門と呼ぶ

曾木渡場の嚮ひに見ゆ岩腹の洞窟に地藏の大石像を安置す、正面に法海萬靈、左右に日牌當道開主同國行者、月牌禪曹洞真如庵禪海、傍に諸方助力萬人講供永代牌因緣施主、願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道、武州江戸淺草住祖先越後高田福原氏、奉納大乘明典六十六部供養所、寛延三庚午八月一日と刻す

○杣瀧 南方最終の洞門の左方此瀧雨中又は雨後にあらざれば見えす

○惠比須巖 最終の洞門の右にあり

○大黒巖 (一名帶岩) 惠比須巖の右に高く聳え中腹束帶の状をなす躋攀して看るときは帯は平坦なる洞穴にして巾二間餘數百人を納るゝに足る

○鬼面の洞 大黒岩の左方小洞の傍、鬼面に類似せる岩貌を云ふ

○妙見巖 大黒巖の背後にあり半嶺の大窟に妙見社を祀る、青の原方面より詳かに看るを得

○殿巖 又殿岩戸と云ふ、大黒巖の右方にあり

○双松巖 耶馬橋より東方に當り長幹巨岩を凌ぐの老松二株あり

頼山陽

峰容面々趁看殊、耶馬溪山天下無、安得彩毫如董巨、生縑一丈作横圖

頼山陽

一瞥屏顔未飽情、今遊眉目始分明、賞心不負平生展、耶馬溪頭兩度行

廣瀨淡窓

豊南豊北數里程、馬溪風物最關情、半千羅漢披雲調、五十飛梁踏月行、夢裡驚瀾猶激湧、眼中奇石忽崢嶸、要將詩句留通景、苦恨峰巒不識名

○山陰鑿道碑銘並序

豊前の山骨多く肉少く懸崖絶壁、奇を争ふもの多し矣、而

して其最も靈秀なるものを、耆闍崛山と曰ふ、所謂阿羅漢
 禪寺あり焉、羅漢寺を距る十里許り（今半里）溪壑接連、峰
 巖峭峻、骨益瘦せ肉益少し、圭の如く璋の如く聯輝合彩雲
 間に屹立して奇狀を銜ふものは跡田山也、源を彦山日岳に
 發すること西數百里、衆澗の會する所を統べ、天に接し岸
 を排し、滾々洄流して跡田村を抱き中津城に抵り龍王海に
 奔注する者は跡田川也（果仙曰く山陰鑿道を跡田山、爭流
 川を跡田川と云へるは撰者初遊にして未だ地理に通せざる
 より之を誤るのみ本文にて命せし競秀峰とは洞門の峰を指
 し爭流川とは山國川を指すこと自ら明なり）之の二者は俱
 に村に因て名づく焉、石の墻立する有り高さ數百丈徑亦之

に稱ふ、河に趾し岸に枕し而して岸上の道、將に羅漢寺に
 登らんとするもの、繇る所なり、而して此石の閉づる處た
 る道を開くに地なし矣、民人乃ち水際の岩畔に於て棧を設
 け鎖を施して其行人をして深淵を左にし階壁を右にし鎖を
 牽き棧を躡み歩を捨て而して涉らしむ因て稱して鐵鎖渡と
 曰ふ、然して石滑に棧危く巖牙指足を嚙み心、酸澁、動もす
 れば輒ち歩を失して或は汨流に墜ち而して溺死する者多し
 矣此誠に慨すべき也享保年間江戸の僧禪海、適また其崎
 嶇艱難の狀を見、即大誓願を發し、石を鑿ち路を通じ以て
 沒溺の患を救はんと欲す直に鎚を執り鑿して而して進む時
 に附近の村民、洒然として怪笑す、禪海益堅忍不拔の志を

抱き必ず之を開拓し以て其功を成さんと欲す、祁寒極暑と雖も淬勵益力め窮日息まず、已にして鑿稍深く功稍見はる是に於て初怪笑せし者終に其心力勇銳誓願の鞏固なるを感じ財施し力施し勸讚隨喜す而して後三十年其功竣る矣、其高さ二丈其徑三丈其長三百有八歩形甬の如し道並騎して行くべき也數十歩を過ぐる毎に必ず壁を穿ち窓を作り以て日月の光を通ず、是に於て戰兢危懼の渡を變じ坦然安穩の道と爲す絡繹として往來するもの噴々稱嘆せざるはなし焉、寶曆癸未の秋余九州の勝を探り羅漢の山に上り堂頭無學和尚を訪ひ乃ち親しく鑿つ所の道と山水の美を見る因て和尚に謂て曰く禪海の功、持地菩薩と髣髴たるべし山水の美、

會稽山陰と伯仲すべし和尚曰く此勝概ね僻地に在り故に祗村に因て以て名を爲すのみ謂ふ師更に命名せよ余曰く曩昔願長康、會稽山水の美を稱して曰く千巖競秀、萬壑爭流又曰く山川自ら映發し人をして應接暇あらざらしむ今此亦爾り爾れば山は宜しく競秀と號すべく水は宜しく爭流と號すべし而して鑿つ所の道山の陰にあり宜しく之を山陰道と號すべき也今茲に明和丁亥の春和尚藏經を欲して平安に入る是に於て禪海書を裁して余に鑿道の銘を請ふ余重ねて其功を想像し而して歎じて曰く修羅多に云ふ心を一所に制すれば事の辨せざるなしと蓋し禪海の謂ひ乎但に行旅の人を利するのみならず復以て出家學道の人志を勸弊するに足る

矣古功德あれば則ち必ず金石に銘す今禪海の功宜しく之を
堅石に勒し之を不朽に垂れ以て遐邇に傳ふべき也乃ち隨喜
讚歎之が銘を爲して曰く

跡田之山 嶺馬千峰 跡田之水 衆澗所鍾 山水之美
會稽維同 有石當路 高聳碧空 絡繹行旅 乃哭
途窮 牽鎖踐棧 寒粟徹身 若失一步 定墮水中
懿哉禪海 能勒其功 錐巖壁 人感其衷 財施力
施 協心是從 經三十載 克遂其功 長三百步 并騎
而通 豁開鑿道 勝彼鬼功 持地平道 此績芳蹤
盛功勒石 永劫無終

明和第四丁亥孟夏穀旦

金龍敬雄杜多撰

龍山阮仲明書

○禪海の略歴 羅漢寺記録直寫

權大僧都眞如庵禪了海、幼名市九郎と稱し越後高田の藩士福
原勘太夫の一子なり父の勘氣を受け江戸に至り中川家に住へ
て淺草に住す後其主中川四郎兵衛を暗殺して遁る而して諸國
に彷徨して更に止まる處なし享保十九年豊前に來り宇佐八幡
宮並に南山に參拜し窟中の勝景千古の靈場に驚く一日樋田村
の上即鎖渡を過ぐ道路狹隘にして河に臨み岩腹危險にして往
來甚便ならず動もすれば人馬誤て河中に墜つ市九郎之を觀て
慨然大誓願を起し發心出家して同夜此鎖渡の難道を開鑿する

ことを勤めたり又江戸中川四郎兵衛の長子中川實之助父の殺害せられたるとき甫めて三歳禪海の非道を憤り十三歳にして柳生但馬に従ひ日夜武道を勵み十八歳にして其奥義を極む而して諸國を歴遊し畿内及東海東山山陰山陽北陸南海等悉く跋渉し禪海の所在を尋ねれども明ならず終に九州に下り一日宇佐八幡の大廟に參詣す偶傍人の告に依り禪海の所在を知る嗚呼二十年來の宿志將に達せんと天を仰ぎ地に伏し直に馳せ來つて海に會し在昔の非義を詰る海曰く既に染衣鎖渡鑿道に着手し其功殆ど垂んとす君願くは海に三年の命を假せ此業竣ば謹で君が命に隨はんと實之助其至誠に感じ父の讎を復することを得ふし却て之に力を與ふ幾何もなく鎖渡鑿道の功

竣へ一周間水陸摩訶法會を嚴修し中川四郎兵衛の靈に供養す此に於て實之助懇ろに暇をなし江戸に歸り此狀を告ぐ一族敢て怒らず聞く者感動せざるなしと云ふ、禪海大願已に成就し中川家年來の憤怨亦解くを得たるは禪海自ら然らしめたりと雖復何ぞ三法歸依の徳に依らずんば復讎の殺氣を解くを得ん哉爾今道心益篤く十方の信施と一餐の餘糝とを以て小庵を結び此郷に留まり權大僧都に進められ念佛三昧以て餘榮を遣る明和四年永代祠堂として田畑一丁餘並に銀二貫匁を當山に寄附して恆期の大法會を修行し祖先の追福、死後の佛果を祈り曹洞の佛法を興隆せしむ禪海貞享四年を以て越後に生れ安永三年甲午八月廿四日を以て他界に遷す即ち羅漢睡龍山の右側

に葬る享年八十八禪海の如きは眞に稀世の佛子と云ふべし惜哉星霜漸く轉じ其遺勳を紀するもの稀なるに至る

果仙曰く禪海の履歴は多く湮滅して眞を稽ふべきものなし

左に父老の口碑一二を記し識者の教を待つ

○禪海主を殺し江戸を遁れたる後、暫く木曾山中に潜伏して山賊をなす此時禪海携へたる妻あり(出所不詳)或夜禪海其拐取せる貨物を包みて持歸りけるに妻之れを披き見大に喜び是尋常ならざる人の美服なり斯程の美服を着せる上は定めし頭髪の具も珍重のものならん笄釵など何の處に挿み置かれしや疾く見せられよと云ひければ禪海憮然手を拱すること久して吾今山賊たりと雖惡業をなすは常に良心に恥づる處吾今服を

奪て頭髮の具に心付かず彼如何惡人の妻たればとて好惡邪見に長せるの甚しきやと茲に迷夢を破り會心懺悔遂に妻を去りて六十六部の行者となり諸國を遍歴し享保十五六年の頃は豊後油布院某寺へ寄食せりと云ふ

○山陰鑿道の工事費は掘屑一升と米一升と云傳へ米一升の價を拂はざれば掘屑一升を得ざりし程にて當時火藥など使用するの術なく只慙のみを用ゐたるに依り勞多くして効擧らず前後三十年間禪海の艱苦困頓想像するに餘りあるべし

○犬飛 一名犬走り 耶馬溪三飛勝の一にして琴川(跡田方面の支流)と争流の本溪と相會する處を云ふ、奇岩怪石踰居偃蹇相望めるの一側に空洞ありて天然橋となる洞邊飛湍雪を

噴き奔て橋外に出づ香魚雜鱗其中に跳る、此を渡れば

○青 又青生と云ふ此處は頼翁再遊の歸途即臘月十二日合公と共に一宿せし地(記文阿保村)なれども今其宿舍詳ならず名産耶馬溪燒陶器製造所、旅館、飲食店、人馬車駐車場

○耶馬溪燒は茶人松月園左樂翁の創意に係り専ら溪山を模とし溪泉を範とし古色を呈し雅韻を備ふるを以て名あり近時窯業に一進歩を告げ貴顯の眷顧を得るに至れり

○耶馬溪保勝會 溪中の志士聯合一大奔走の結果、今や其基礎一氣呵成愈々確立するに至り、先づ耶馬橋畔に事務所と觀光者待遇所の一壯館を築き、尋で頼山陽及び禪了海の紀念碑を建て各勝境毎に種々風流的の亭榭を設け又凡百花卉の栽培

保護、御賞路の修繕開拓など萬般の設備を爲さんとす、されば今後耶馬溪の榮華隆昌、今より想像すべきなり

○小野櫻山學客と馬溪文庫 櫻山翁は元岡山縣の人、深く漢籍を究め、書畫の妙域を踏む、馬溪に杖を止むること二十餘年専ら山水を友とし風流韻文を事とすと雖又時に悲歌慷慨の氣骨を見ることあり又翁は箇の天下の名山水に對し自負する所あり單身馬溪文庫を創立して以て馬溪の文學を興隆せしめんとし筆劔を負て南戦北闘幾多の辛酸を嘗めたる結果、既に其蒐集するもの三萬卷、即今居を青の絶勝地に卜し書卷牆壁の中に起臥す

本 田 種 竹

一百八峰巒、七十二瀑泉、收之方寸裏、縮地小神仙

○耶馬橋 東城井村大字曾木字青と上津村大字跡田字中島の
間なる琴川に架設せるもの、眼界稍開け北に競秀峰、妙見宮、
西北に曾木字洞、冠石の諸峰、東に双松岩、南に古羅漢の飛
來峰、耆閣嶺山石梁の一端などの絶景を望み且本溪と跡田方
面の岐路に當り、觀光者吟杖を留むるもの多し

○中島 觀光の好位置にして旅舎、人馬車駐車場、飲食店あり

純石爲峰勢欲飛、峰頭更載幾屢巖、西州索畫無多獲、

獲此天然黃太癡

賴山陽

范緩倪迂黃大癡、諸家風趣趁日走、南宗畫訣君休說、

耶馬溪山是我師

平野五岳

有栖川若宮殿下

蒙御買上之榮

耶馬溪觀光最好紀念品

名產 耶馬溪燒陶器

耶馬溪字青

窯元

吉村松月園

初代

吉村左樂

創業

明治三十五年八月

耶馬溪字青

發賣元

吉村松月園店

中津京町一丁目

特約店

丹羽長次郎店

耶馬溪字青

山國屋旅館

眼前に競秀峯と

犬走の絶勝を

占め申候

眺	望	佳	絶
室	内	清	潔
料	理	新	鮮
待	遇	懇	切
名	産	販	賣



耶馬觀光紀念寫真撮影處

耶馬溪眞景寫真
繪葉書販賣店

耶馬溪字青

松永寫真館

眺望絶佳

耶馬
橋頭岩田旅館

來青舍事

△耶馬溪繪葉書

△耶馬溪名產各種

△人馬車駐車場

○耶馬橋より柿坂地方と深瀬溪(又新耶馬溪と云ふ)の探勝と出掛くるものは先づ左の案内と第三編の耶馬橋を認め置くを肝要とす

耶馬橋より柿坂地方と深瀬溪に至るの順路二あり

一は本溪を登り柿坂を経て深瀬に至り歸途鼻環峠を越し西谷村を経て再び此處に出づ

一は鼻環峠を越し深瀬を先に見て柿坂を経て再び此處に出づ (地圖参照)

耶馬橋より	深瀬まで(柿坂を経て)	六里三十丁
柿坂まで	深瀬まで(はなぐりを経て)	五里十二丁
羅漢寺まで		二里廿六丁
中津まで		十里廿五丁

○いで是より羅漢寺と洞鳴瀧に案内申さん、耶馬橋より左折四丁餘にして又左折二丁にして琴川の琴川橋に至る橋を渡りて人家のある處を小出と云ふ又數十歩にして下の門前と云ふに至る

○羅漢寺に二十四勝あり而して此邊より其勝を看初む故に登山の道順により之を紹介す此處の川の向ひにある山を古羅漢と云ふ

一飛來峰 古羅漢の最高處を指す

金龍敬 雄以下同

靈鷲山一朶、飛來海水隈、聞道祥雲裡、應真時往來

二天人橋、古羅漢山空明なる天然の洞門二あり而して其上

にあるを天人橋と云ひ下にあるを毘沙門と云ふ門上の巖壁に毘沙門の像を刻せり

勿利魚應上、橋鼻古溪中、山色雖如斷、覺路通古今

古羅漢山の表は跡田の方に面し此處より見ゆるは其裏面なり表面の窟中幾多の石像を安置し廻廊を築けり、裏面より登らんとするには川を渡り毘沙門の直下よりすべし
紀念碑距降龍橋巽一千五百間道路修繕と刻せる碑前を登れば左方百間の向ひに

三伏虎巖 あり巖上數個の石佛隱見す

昔聞望夫石、今知伏虎巖、雖無ニ爪牙用、負嶮嘯ニ箔杉、
此處を登り詰めたる路上智剛寺あり智剛寺の左方の壑奥

四達磨瀧 あり

懸泉名初祖、古今翠壁寒、直轍禪河底、達海作波瀾、
五寒山巖 智剛寺背後の崖岩を云ふ

僧厨滌器歇、寒拾吟歩同、忘却來時路、安石縫中
六從容館 寒山巖の右にあり

孤館青山裏、千巖紫翠流、松風吹不斷、好作采真遊

○禪海の墓 寒山巖の山脈の上にあるを睡龍山と云ふ其麓の
堅岩を井狀に深く穿ち之に貫を通し蓋を覆ひ上に細小なる石
を建て墓標となし、眞如庵禪了海墓 安永三年午八月廿四日
越後産鑿道開主と彫せり今は荆棘道を没し參詣すること能は

ず嗚呼此偉人にして此事ある嘆ずべし慨すべし

○智剛寺前より杉林中の磴道を行く二丁にして石疊の稍廣き
所即金剛關(二王門)の前に至る左側の斜岩上一路の通ずるあ
り是を參詣道とす數歩にして杖捨ての坂あり又數歩にして三
廻塔あり次に賽の河原と云へる地藏あり、此處は宛然馬頸の
上を行くが如し、眼を放て馬溪の山水を瞥見すれば恍然とし
て世外の感あらしむ

七石梁

豈與略約同、如虹跨澗中、何須問諗光、驢馬本自通
世の中にたぐえてかけし石の橋あやふきとても誰か渡ら
む 小笠原長勝

後の世にまよふは知らず石のはし今日は佛の道を渡らん

同

○石梁を行き當りたる正面に彌勒の石像あり是より左の嶮坂を下り石梁の下に出づるを手のひら返しと云ふ、石梁の下を潜りて始めて石梁の石梁たるを知るべし次に六地藏に

八普濟樓 (千體羅漢)

頑石雕爲聖、豈但作點頭、雲集何所作、應濟愛河流、九微妙華、雨露なくして堅岩の上に獨生せし小櫻の花を云へるにて香雲閣の前左方にあり今枯朽す

石罅生奇葩、未曾用培植、爲近無漏窟、日沾法雨開、十香雲閣(山門)額に耆闍堀と書す、即非和尚筆

香閣誰不レ入、空尋百十城、勿鈍置慈氏、枉用彈指聲

十一無漏窟 即五百羅漢所在の大巖洞

何必雞足山、法窟堪入禪、賢聖爲雲集、時々天雨蓮山ふかみ分けきてみれば室の戸も花にとちたる昔しをそしる 小笠原長勝

○甘露泉 無漏窟釋尊前の小湛を云ふ冷々石罅中より出で四時涸るなし泉味甘冽、一掬すれば骨を氷にし齒を霜にすと云ふ

法の水たぬ流をむすぶ手にすめる心をうつしてしかな

同

十二蟠龍洞 (亦針の耳と稱す)無漏窟前の大空洞を云ふ、

龍首巖上より瞋目疾視す

石龍蟠ニ洞口、洞中雲霧深、恠來風雨夜、真成作悲吟

十三華鯨樓 蟠龍洞の半顛にある鐘樓を云ふ

花宮催ニ仙梵、曙雲繞ニ半峰、欲レ使レ發ニ深省、叩落數聲鐘

十四高原水 蟠龍洞を潜り出でたる處にあり崖頭の懸泉屋

上より湛池に滴瀝す

曹溪一滴水、五派何強開、不レ待レ歸ニ滄海、原從ニ阿耨ニ來

十五鳳臨亭 額義滿公筆

山亭臨ニ大壑、時々鳳鳴聞、來儀不レ可レ見、但是生ニ彩雲ニ

○地獄極樂 本堂の左側より巖洞の間暗黒なる處を行き屋上

の摩尼殿に登り又暗黒なる處を下りて石蘭室の傍に出づるを

俗に地獄極樂と云ふ

十六摩尼殿 本堂の屋上

巖岩開ニ寶殿、緇素開ニ金仙、玉毫摩尼色、照來萬八千

十七石蘭室 本堂の右方

毳徒曰參得、禪悅此徘徊、般若無說聽、天帝雨華來

○鶴算樓(方丈室) 昔公儀賁臨の室にて巖崖絶壁の上僅に柱

楹を支へて築く、下は千尋の壑にして馬溪の諸峰一眸に入り

黛色掬すべく蒼翠沐するが如く眺望絶佳なり遊で仙茗を喫し

登山の勞を醫し寶物など看んと欲するものは刺を通じて是を

執事に請ふべし

○題字題名詩歌文章繪畫を以て登山の紀念を留めんとするも

のは亦之れを執事に請ふて揮毫すべし

又世の篤志家は宜しく淨財を投じ當山保存費及灼香の資を補

ひ靈山をして益靈ならしめよ

○當山寶物中其珍なるものを抄出すれば

一 閻浮提金觀世音像

一 日月三光硯

一 鬼兒

一 龍鱗

一 菊銘石

一 佛舍利

一 三猿の觀音

一 菅公心經

石礪室を見て本堂を出で左を行き岩坂を攀ち東照宮、説夢堂

(經堂)を過ぐれば

十八 指月庵

千嶂松蘿裡、明月滿三庵前、似入三天龍室、唯參一指禪

十九 仙掌巖 指月庵の左より三四丁登る

雲晴仙掌上、仙掌可攀難、巨靈分破後、至今采翠寒

迷ふともなほ分け入らん山深み今日をまちぬる花もこそ

あれ 小笠原長勝

谷深く霞にこもる柴の戸は夕の秋も春にしられん

同

二十 拈華頂 耆闍崛山の絶頂

拈華衆峰頂、雲開黛黑寒、爲問祖門客、誰作破穎看

仙掌巖と拈華頂は道嶮にして容易に行くべからず

二十一 鷄足磴 鶴算樓の下にあり

團々無縫塔、時却定中移、應知金襴服、爲獻龍華時
此處の下り道は之を右方下山の道に比すれば稍峻峻ならざれども更に看るべきものなし故に之より又以前の道に戻り本道の前より普濟樓の前に出で左の坂を下るべし此處を不動坂と云ふ

○坂下澤村大學の碑あり其事蹟見るべきものありと雖も煩を省き今其碑銘のみを録す

何人生ニ斯寧馨兒、生三日有ニ食牛氣、始自ニ布衣而起、獨抱ニ鴻鶴之志、事ニ君致ニ身、信近ニ於ニ義、忠哉介推、割腹難矣程嬰立ニ孤、伊尹耕ニ莘野、諸葛居ニ草廬、勇ニ奪孟施舍之守、功出ニ廉頗之右、題ニ名於ニ山窟、遺ニ譽於ニ不朽、寬

永之秋九月良辰、

齊院次官親義苗裔

豐州之産 波多中庵易簡誌焉

二十二翠壁磴 不動坂を下れば右側にあり

丹岬將翠壁、天窄石磴昏、江湖參立士、直入ニ涅槃門

二十三金剛關 (二王門) 不動坂の入口

初地古山門、二王相見悞、若人問ニ如何、依然忿怒漢

二十四降龍川 羅漢川を云ふ

○羅漢寺緣起

相傳ふ空也上人古羅漢窟に來り錫を留む其後豐後國田澁郷より圓龜照覺禪師此山に來り浮圖を構ふ、又逆流健順、大阿羅漢石佛を彫刻す、人皇九十七代 光明帝略應元年戊寅十月

朔、石佛悉く成り安置供養あり耆闍崛山羅漢寺と號す爾來健順終る處を知らずと云ふ
 又豐鐘善鳴錄に云ふ圓龕禪師諱照覺、覺後田澁郷の人俗姓大神父を雄將と云ふ曆應の始め故里に還り豊前の大巖窟に躋る其窟縱横若干丈千人を容るべし石屏東列し石橋前横す師自ら十六羅漢の像を圖し窟内に奉じ耆闍窟と名け庵を岩下に結び榜するに幼住を以てす居ること何くもなく又岩窟を去り一枸廬舍智剛寺を建て錫を遷して靜居す、延文己亥春、雲樹の徒健順偶ま來り師に見ゆ師順を誘ふて洞窟に遊ぶ順遂に窟に入り棲息す一日師に語つて曰く此窟靈區實に是羅漢棲眞の處なり聖像を彫刻して窟中に安んせば則永世の福田ならん乎云

云師順と共に工技に長ず鈍鑿一運妙に相成就す彩飾を加へんと欲して至心地を掘れば丹護の類鑿に従て湧出す既にして釋尊文珠普賢十大弟子二八の應眞、半千尊者及待衛のもの都計七百餘軀、殊儀異貌、儼然として位に倚る、宛も衆星の満月を圍むが如し云々 庚子冬十月望日慶讚供養し一千餘員の僧を聚め聖福月堂禪師を請て開導師となす云々
 ○貝原益軒 羅漢寺紀行文の一節に曰く凡そ此處は稀有なる靈窟なり予諸國を多く遊覽せしかども未だかやうの奇絶なる所を見侍らずとあり

根託ニ懸崖ニ苦節多、月明倒照影婆娑、記來羅漢寺邊路、
 鳳尾垂々梢帽過 賴山陽

萬巖影碎碧潺湲、慣看行人渾等閑、從古喧傳羅漢寺、

何知剩水與殘山

同

題羅漢寺瀑布

田能村竹田

懸水三十仞、疾雷聞數里、盛暑涼生秋、倚杖夫誰子

病中贈別家弟遊羅漢寺

村上佛山

羅漢山中寺、奇工役鬼神、危橋架片石、大洞容千人

白雲埋僧座、苔青蝕佛身、病狀殘夜夢、趁爾上嶙峋

○洞鳴瀧は羅漢寺より西南九丁にあり此に行くには金剛關の

前を左に下り上の門前(一旅宿あり)より羅漢谷の本道を横ぎ

り谷を涉り古羅漢と山脈を同ふせる香具山の裏面を右に見つ

つ菅川内と云へる谷間を登り小川内に下り、向ひなる猪群山

(井原の後方)小岳、木の子岳、葛籠山(左方より洞鳴瀧に聳

ゆ)の諸山を望み左折山腰に副ひ洞鳴橋を渡り又行くこと數

十歩にして水聲の高き處に歩を轉すべし

之を觀るの好位置は其下邊、崎嶇峭峻恰も屋角の形狀をな

せる岩層の上にあり瀑泉三流に別れ跳號碎激、捍怒して巖根

を嚙める所更に左方一瀑の飛沫之を横流し漣々相合し涵澹澎

湃して瀉出す、上流の坦々たる磐石の上を濶歩すれば嵐光掩

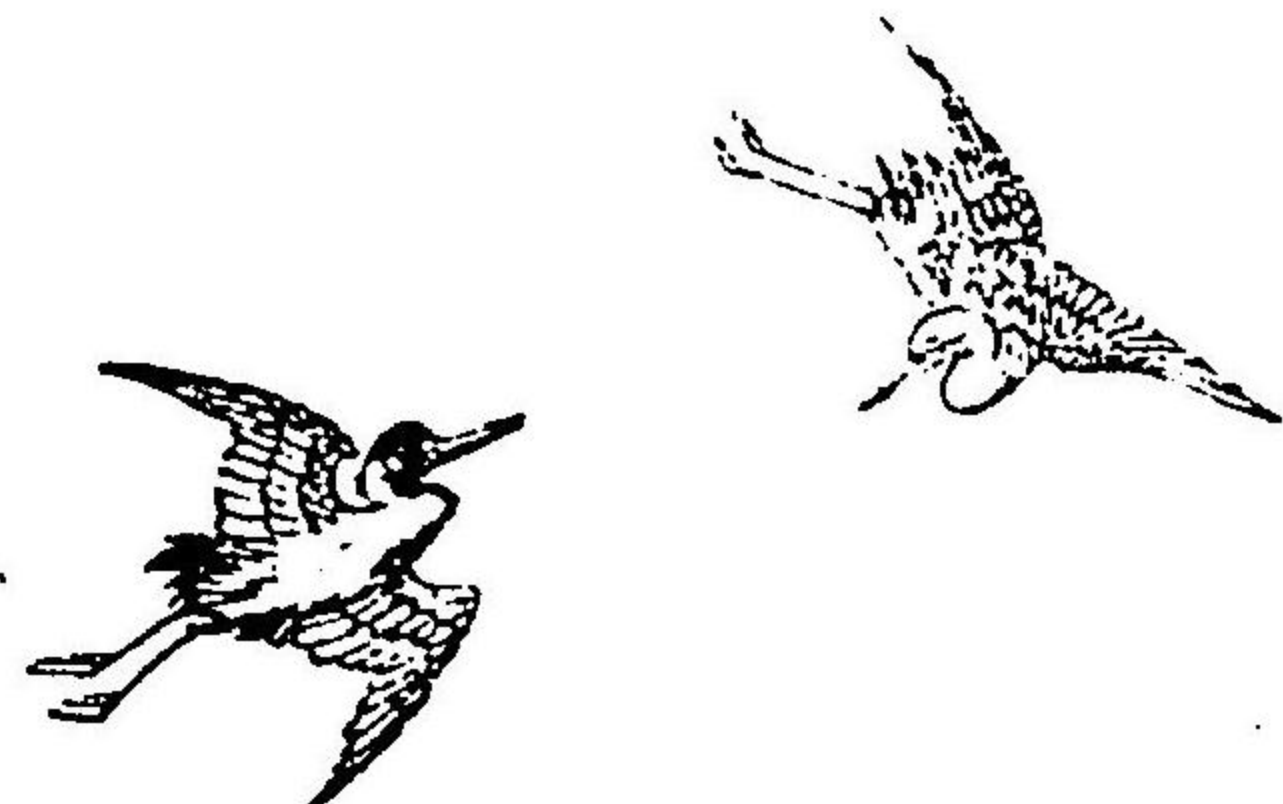
映青巖飛ばんとす、向岸なる小峭壁の水に磨せられ、碧色を

呈するの美は、猿飛の奇勝を想像すべく、路傍の奇石を疊積

したる天然築山の麗は雪舟の假山に比すべきなり此瀧高さ僅

に一丈五尺瀧としては未だ必ずしも賞するに足らずと雖も其

所在の境域變異なるを以て世人之を嘖々す
是より耶馬橋まで二十丁其間井原、跡田の途上は琴川を隔て
會稽山（羅漢山を指す）の層樓重閣を白雲の間に望み羅漢山の
危欄を層巒孤嶂の一邊に看る



耶馬溪案内記

第三編

耶馬橋より柿坂に至る

○耶馬橋より本溪を溯るの途二あり一は犬走を渡り河西より
し一は本道を行きて河西よりす而して河東の山容を觀んとす
るには河西を行き、河西の山容を觀んとするには河東を行く
べきものとす、是兩岸とも通路の上、山峰聳立して背後の方
は觀る能はざるを以てなり、故に東岸より行きたるものは西
岸より歸り、西岸より行きたるものは、東岸より歸るべし、但

西岸は人車の通せざるを承知し置くべし、今案内者は東岸の本道より溯り行々向岸の勝景をも併せて紹介す

耶馬橋より一丁にして

○上曾木の長潭を數十仞の下に觀る、此長潭は、犬走の上より蕨野の浦に至り殆ど六七丁の間、大磐の割裂せられたるものより成り更に土砂あるを見ず、水色蒼然として潜龍の感あり、河の西は即

○上曾木猪谷(又猪の迫)にして連峰隆峻、恰も笏を攢め、圭を植つるが如し、中央に礪柯石と稱し、僊客圍碁の狀に似たるものあり

秋 畝 居士

疊々危山立、綿々澗水清、轉山又轉水、到處總有情

學 海 居士

溪轉路廻峰復峰、彼迎此送巧相逢、忽從雲外飛、奇嶂

看目巖間吐、惟松

○耶馬溪の一大物産、此邊より造林を見初む耶馬溪山は骨多肉少しと雖水源の涸渇することなく崩崖峭壁は雨露をして益々膏腴ならしめ草木蓊然潤澤の色を呈すること他に多く見ざる所、就中杉材檜材は最其生育に適し山々峰々造林のあらざるなし是耶馬溪の一大物産にして年々他方に輸出するもの貳參十万本に至ると云ふ
耶馬橋より四丁許にして

○蕨野三日月池 に至る路左の華表の額に三日月神社と印す
 節婦、難波部の首子刀自賣の舊蹟なり、一二十歩立寄れば老樹
 深碧中、巨磐あり磐麓窅凹して眉月の状を作す即三日月池な
 り一祠あり伊勢大神を祀る、境内新月形の竹を生じ往時は是
 を花器に製作せりと、又三日月池は豊前四名池の一にして其
 四名池の名を、三偶、菱形、鏡、三日月と云ふ
 ○三個の三日月、蕨野の地、三ヶの新月形相重りて恰も三つ
 組の盃を側面より見るが如き一奇觀をなせり而して河流其下
 蓋となり田面其中蓋となり池其上蓋となれり
 ○賢女岳 是三日月池の後に聳ゆ蓋節婦刀自賣に貌りたる名
 なり

○節婦難波部首子刀自賣 本朝列女傳に云刀自賣は豊の前州
 人なり、刀自賣年十八歳、下毛郡の大領、勝宮守の家に適し
 既に二十箇年を経て宮守死去す、刀自賣獨り空室を守ること
 茲に十歳、遠近の庶士之を求むること少なからず而して同穴
 を諒とするありて再醮する心なし亡夫の遺衣を愛し獨守の牀
 上に置き朝夕毎に見て追慕息まず、而して甘珍を得れば必ず
 亡靈に奠す隣里嘆稱せざるなし、仍ち閭門に表し以て貞操を
 旌はす也、天長四年春正月其戸課役田租を免じ終身無事
 頌曰
 天長年中、有女高義、永獨丁役、正受天賚、牀設遺衣、
 以薦時食、如斯是誰、豊州刀自

刀自賣 三日月の池に寄せて亡夫を慕ふる

忘れすはたのみし人の俤を一夜はうつせ三日月の池の一首は上聞に達し其貞操を賞せられたるものなりと又刀自賣の和歌に

三日月の池のほとりにみそきして君か千年を神に祈らん
松か枝の緑にうつる鳶の葉のにしきを洗ふ三日月の池

節婦行

佛山山上剛字大有

節婦難波部首小刀自賣者、我豊前下毛郡擬大領、蕨野勝宮守之妻也、夫亡、執貞操、天長四載、詔旌門閭、免其租課、詳于日本後記、頃八條半坡、寄書于余云、國有節婦而古來無誌之者、子請賦焉、因有此作、子刀自賣

所居之山、後人呼爲賢女嶽、祠祀之祠前、有臚池、夫妻嘗具咏臚池歌、今尙傳焉

初月出雲端、受以清池水、水月相映射、其光淡々矣
君子鳴珮環、少婦隨而至、夫賢婦亦賢、真可稱双美、夫願謂其婦、月與卿眉似、婦進謂其夫、水與君心比、仙駕一去渺難尋、十年夜雨擁孤衾、咄遊蕩子莫相狎、婦無二天古來箴、白刃或可加吾頸、黃金豈可動此心、故衣堪愛情、朝暮手不釋、展之欽餘香、撫之慕遺澤、却恐淚痕多、錦綺變其色、懿行達天聽、下詔行褒旌、宜哉千歲後、山傳賢女名、君不聞松浦佐用姬、領巾招夫淚頻揮、此婦奉衣跡相類、貞婦自是如有所期、

肥海豊山明月夕、芳魂定應相追飛

○蕨野湍瀧 蕨野の後の河流、懸崖より激下するを云ふ、一丁許下方の途上より見ゆ、倘接近すれば飛瀧雷震、萬斛の明珠、峭壁より散するが如し、此湍瀧は高さ四間水勢常に満漲するを以て他日耶馬溪中に工業製作場を建設するに至らば是を利用して水力電氣を起さしむるに至らんと云ふ

蕨野より二丁左曲して岩角の下を過ぐ對岸を大字冠石野と云ひ冠石野の背後の山を總見山と云ふ、仰で山巔を望めば一老松の鬱生せるあり其老松の左に

○投冠石ありて分明途上より見ゆ、形狀冠に似る、傳へ云ふ勝宮守官職を退き冠を投せしに其冠自ら飛翔して此石に化

○九曲屏 賢女嶽の冠石野に面せる絶壁を指す
是より右曲して大字多志田に入る左方田圃の中に

○八王子宮あり 五男三女神を祀る此大字は八王子宮の靈験により古來火難なく又田面に落雷なしと云ふ

○耶馬溪の特有物産 へら皮、へら樹の外皮より製す、織緯甚だ強く一見、鉋屑の大なるもの、如し、専ら苧に代用せらる第五回内國勸業博覽會に於ては大好評を得て内外人の注目を招きたり目下帽子、敷物の材料にも應用せられんとしつゝ、あり、本品は耶馬溪の特産にして隣國の一地方にも少許を産すれども溪中産の如く精良ならず又溪中にも殊に優等なる

ものは多志田べら(此大字)原井べらと稱し價格常に貴し一年の産額約八千貫、一貫に付代價約參拾五錢

○疊書巖 多志田、丸山の上にある

○鹿跡と焼飯岩 多志田の向岸、嵩頭に蟠まりたる老松の下邊にあり、鹿跡は其處の路傍の堅岩上に八九個を印し、焼飯岩は其處の河中に見ゆ、此邊り一種の奇鳥あり其形百舌鳥に類す、夜に入れば鳴て、チエカー、クロクチカーと呼ぶ其故事たる、昔薩摩國の獵夫、チエ、クロクチと名くる二獵犬を携へて遠く鹿を狩り、追跡此處に至り根氣消滅して遂に其鹿を逸す、獵夫之を遺憾とし携ふる處の焼飯を河中に投じて死したるが、焼飯は化して石となり、獵夫は變身して奇鳥とな

り、夜なく二犬の名、チエ、クロクチを呼び、逐鹿の學びを爲すと、是小兒らしき記事なれども口碑の儘を録す

○條觸の築 多志田と向岸の間河流二つに分ること二丁許り中島をなし叢竹の中、長松疎生す、其西流の急湍を條觸と云ひ香魚を漁する溪中唯一の築場なり

○巖洞山 久福寺、條觸の上邊にあり、縁起に云ふ當山は岩の形、自然觀音の妙相を顯すを以て補陀岩と號し、養老年間仁聞菩薩、自ら觀世音を刻み、岩窟に安置し圓通洞と名く、後一人の行者あり來て當國中三十三ヶ所に觀世音を安置せられ、彦山古代の法運和尚、各地の觀音に就き詠歌し給ふ云々境内勝宮守の墓あり、當寺に秘藏せる矢根、黄金觀世音は勝

宮守の遺物なりと

岩洞之形如佛像、衝雲直立三千丈、晚鐘聲裡有僧歸、

禪屋自然秋氣爽

學海居士

紅楓林裏逕三叉、萬丈古龕佛所家、時在西風吹葉散、

繽紛疑是雨天華

吉田玄遊

此邊り古人の選びし左の八景あり

一賢女岳 二三日月池 三悲應化山(柚留木の奥)

四秋葉嶺(大洞あり久福寺の左方の岩山)

五圓通洞(勝宮守の墓あり) 六孤猿窟(觀世音安置)

七投冠石 八牛尾峯(毘沙門安置中村の西方二丁)

○蜂窠巖 巨岩の崩壊せるを見て五六歩の處

○停立巖 又立留と云ふ蜂窠巖と接す

長笛材の名所なり、渣呀たる奇峰の半巔、煙梢を認む此處は

梵鐘、湍流、馬鈴の三清音、和奏するの境に當り能く邪穢を

滌去して之を雅正に入らしめ靈に通じ微に達し情を寫し神を

暢ばしむるの妙音を發する長笛を生すと云ふ、蓋し立留の名

は其妙音を聞くに因したるものなり

是より口の林まで八丁其間を大字戸原と云ふ一二の旅館と飲

食店あり向岸は大字平田なり岸上に有名なる古刹

○三慧山西淨寺あり、大内義隆の當國菩提所にして門額三慧

山の三字は義隆の所書なりと寺の西邸に

○白米城と云へる城趾あり三四の老松挺立し風辰月夕自ら吟

哦の聲音を發すと云ふ左方を仰げば

○木の子岳 雲際に屹立す、豊前第二の高山たり、此山は遠

く周防洋より白雲縹緲の間に瞰望するものにして山姿甚だ優

美なり、山上に大神宮山麓に龜山神社、御幣岩あり而して龜

山神社は螢火の名勝地たり。

○御臺山 撫石山鷹城山は戸原途上より觸目す、翠碧黛眉、

沐するが如し

○戸原の八石 一狐石(耶馬溪八石の二)面積約四十坪平坦な

る大磐石なり、古來遠近の狐、此石上に來り合番の式をなす

と傳へ頗る人口に膾炙し遊客の酒瓢を翻がへす處とす、此石

は撫石山下にありて本道より六七丁に當る觀光者此處に一時

豊前耶馬溪口の林驛

紫明館御旅舎

元 大黒屋事

○ 醉仙巖の五

瀧泉に接近

し眺望佳絶

○ 器具清潔

○ 調理新鮮

擲筆峰前

柿坂驛

御旅館
甲かぶと屋

甲斐榮司

間を費さば優に是を見得らるべし 二撫石 三鼓石 四龜石

五籠石 六彌太郎石 七舟石 八蛇石

○城井八幡神社 戸原の河嚮ひ平田字宮の馬場まばにあり、應神天皇、神功皇后、仁徳天皇を祀る、郷司野中次郎重房の勸請せしものなり境内諸種の老木繁茂し自ら神寂びて風致頗る勝絶なり

○口の林 山陽記文に屈智林くろのほやしとあり、往昔の宿驛しゆくえきにて頼翁再遊の歸途臘月十二日末廣雲華と駄樽だそんに酔あひをとりし處、今二三の旅館、飲食店、人馬車駐車場、村役場等あり

○口の林七景

佐久間たね撰

鳥帽嵩朝霞

小友田の上

このあさけ狩衣かけしこちして烏帽子かたけに立つ霞哉

飛瀨川流螢 口の林と小友田の間、今の五瀧泉

おちたきち散る日の玉の敷そへて飛湍の川に飛ふ螢哉

車木山曉月 口の林より西方に見ゆ

霧の屋の軒端のものとなりけり車木山の有明の月

宇部山炭竈 三尾母、福土の間

峯つゝき初雪ふかくなりけり炭やき急げうへの山人

机淵晚嵐 大屋敷の下

机川夕波たかくなりぬらし此のきしをり嵐吹くなり

椿原幽篁 机淵の西岸

世をこゝに忘れし人や遁れまし椿か原の五百重竹村

狐藪松林

口の林の南

誰かまた千年いつはる蔭と見む狐か藪の松のむらだち

○城戸瀧 大字三尾母にあり、口の林の河北三丁に當る平磐

石の上より洒々一條の白練を懸く高さ一丈五尺下に瀧壺あり

○鶴坂垂松 口の林の向岸にあり、嵩上より谿路を覆ふ、姿

勢龍蛇の深淵を瞰ふが如し

依田百川

孤株緑掛鶴坂松、數派白奔飛瀨淙、溪左又看城門瀑、

落和雲確響簾々

○五瀧泉 鶴坂より一丁餘、口の林、小友田の間にあり、岩

嶮崎嶮突兀、分れて五區の瀨戸を爲す處瀑泉飛瀉して飄雪花

舞の状を作す、又流螢の名所なり

○大谷山 大字小友田の上かみにあり、小友田は口の林西端の北岸にあり此附近は榎紅葉の名勝にて兩岸より水に映じ錦繡を織る

○鷹城山 口の林後背の高山を云ふ

○醉仙巖 鷹城山の西、本道の左ひだりにあり、此絶勝を觀るには

必ず向岸よりせざるべからず

層障層巒、雲表に翠嶺して匝匝横廻す、又此内容に、琴殿巖、

竹冠巖、懸橋巖、甑巖と稱するものあり

頼翁の記文 群仙肩を駢べて其半身を露はし萬松叢を振ふて

雲中に鼓濤するが如く又廿五菩薩の樂を奏して至るが如きな

りの形容詞に當る

○内宇洞 醉仙巖と高城山の間にあり境域極めて幽邃、攀躋

せんとするときは本道の傍ら境の谷よりす

○高城山 大屋敷の背後の山を云ふ頂上城趾あり津民長岩城

の出城なりしと

○烏帽子岳 小友田より四丁醉仙巖と溪を隔て相對峙す本道

の境の谷邊より見るときは山嶺烏帽子に似る、而して其半嶺

以下崔巍攢蹙せる所を机峯と云ふ

○机峰の各部又左の名稱あり

一馬耳巖 俗に机峰の右を紅豆迫、左を鶴原と云ふ馬耳巖は

其中間より河畔に聳立せり又鶴原には大巖洞あれども道より

見えす

二雲蓋巖

馬耳巖の上邊

三懸雲壁

烏帽子の下邊

○机淵

机峰の麓、此所船橋あり椽木渡と云ふ、北方は津民

村の支谿にして船橋の上、人家ある所を大屋敷とす二三の茶

店あり、椽木渡より柿坂の向岸小川内まで五丁の間西岸にも

又徑路あり

○卷峰

大屋敷の對向にあり俗卷の迫、又鯛懸岩と云ふ岩鏽

双尾の鯛に似るものあり

○朝天嶺

卷峰の後背に聳立す

○筆篋叢

卷峰の麓にあり、俗長藪と云ふ

○鳴瀨 高城山下の急流、鏘然として常に鳴動し山靈水神の

呼應するを感ず

○菩薩峽

高城山の山脈出づる處を指す

○琵琶淵の奇岩

大屋敷より南二丁にあり清淵の兩岸より巨

岩起伏連延し、或は踞して虎の如く或は蜿として龍の如く或

は蹲して象の如し、仰げば菩薩峽、朝天嶺の諸勝を觀るの好

位置にして酒瓢行厨を解くに恰適す、此所は本道より入り込

むこと僅かに二三十歩なれども藪叢、眼を遮りて見えす探勝

家注意を要す

○雲門巖

又天橋と云ふ、大屋敷より十丁にして柿坂の下端

に至る爰より河北の山上を望めば空明なる天然の岩洞あるも

の之れなり其右を仙臺崖と云ふ、左に小河内と云へる小支谿あり谿口は渡船場なり

○柿坂 今より九十年前即文政元年戊寅十二月七日頼翁猪を養て山を賞したる舊地、今旅館、飲食店、郵便局、高等小學校、寺院等あり

青帘往々賣新醕、杜宇花紅夏已回、一百里唯隨潤轉、十三村總背山開、危峰拔地尖於筍、瘦樹纏巖短似苔、怪得旅窓疇昔夢、劔門關下策驢來

廣瀬淡窓

山屐何辭泥路新、天將變套待遊人、群峰得雨如龍鬪、隱躍雲間見爪鱗

頼山陽

簇出奇巖勢接連、挿天碧笋苗春煙、一峰別起形相類、

山脈知如竹迸鞭

頼山陽

○擲筆峰 柿坂の溪北の山を云ふ、頼翁耶馬溪を圖して其由を記す此山に至り筆を撤し嘆じて曰く嗚呼造物奇怪畫手亦寫し至らざるものありと故に此名稱あり觀客溪畔に至り其真相を知れ

○袂が淵 擲筆前の淵を云ふ

澗水潺々迎又送、奇峰岐立幾重々、秋風耶馬溪頭路、

雨庵居士

○柿坂善正寺蓮如上人袈裟掛名號 是信佛家の大に隨喜贊嘆するものにて、奇妙不可思議のものなり、其事蹟の遺物とし

西

東

山口

・石壁

・野

・大野

・平原

・鷹尾山

・鳴良

・高平

・和歌山

・早梅橋

・野

・柳木道

・屏風石

・四手尾

・さか

・端の畑山

・下枝垂山

・上枝垂山

・上り高倉山

・城の尾山

・大野橋

・清水橋

・朝日橋

・温尾山

・尾焼山

・八木蔭堂

・小岳の舟石

・蛇淵

・龍源寺

・柳山道・久留見滝

・温泉

・銅金山

・帽子岳

・小部山

・大平山

・茄子岩

・二谷の尾

・本檜の木山

・ねこき山

・こふの木平山

・いなきが尾山

・をんたが尾山

・こんたが尾山

・聖集石

尾尾山

平原・七橋山

鷹尾山

小岳の舟石

蛇淵

龍源寺
觀岩

鴨良
寺崎羅列

杉山道・久留見滝

島海道

温泉

銅金山

和歌山

帽子岳

早梅橋
風穴

大平山

小部山

鳥巢山

茄子岩

榊木迫

屏風石

二谷の尾

四手尾
いふか

堀の溜山

本檜の木山

下枝垂山

ねこき山

上枝垂山

ここの木平山

深瀬橋
尾城の橋
天狗の橋
天然の橋

いみきが尾山

清水橋
道尾山

をんたが尾山

朝日橋

温尾山
弥二郎橋

こんたが尾山

尾焼山

聖集石

舞出橋

鹿谷峠
三合
三合

耶馬溪案内記

第四編

柿坂より深瀬谿(新耶馬溪)を経て森に至る

○柿坂の三辻より左折十三丁にして尾が篠に至る向岸を白水と云ふ、白水出づるを以て地名とす、又十二丁にして物部に至る前方の高山は

○鹿熊岳 山上、八間石なるものあり又八丁にして

○山瀬臺 左方に聳ゆる三個の巖山を云ふ岩石の破片層疊々す此處にある菊池橋は大字柿坂と山移村の境界なり、橋南を



柿瀬と云ふ、四丁にして竹の弦の隧道、又七丁にして原井又三丁にして

○鼻環越の登り口に至る是即深瀬谿、耶馬橋間の捷徑なり山上、牛鼻環と云へる岩あり形状其名の如し、四五十歩にして

○普門寺橋 往昔此邊りに普門寺なる寺ありしと、橋頭、御祖神社あり、社前三の旅館飲食店あり、三丁にして持田、又十五丁にして

○芝石巖 右方に屹立せる一奇岩の下、路傍に白堊の色を呈する所、木葉の化石を出す、此化石は今古代、顕花植物の埋没せしものと鑑識せられ、殆ど其原形を存するものあり、耶

馬溪天然の一産物にして探勝者好個の紀念物なり

○口碑に傳ふ 山移の地、古代は一大湖水にして今の牛鼻環は船舶を繋ぎし所なり、何つの頃なるを知らず、洪水氾濫して遂に柿坂方面の山岳決潰し現今の形に變せりと、地質學上白堊系は多く貝類の遺殻、固結せしものと云ひ又其岩石は沈澱作用に依る成層岩なる點より考ふるときは、口碑の傳ふる所理なきにあらざるが如し、記して教をまつ

○山は地球皮殻の皺襞 地球は固と一種の流體にして太古其冷却せしとき先づ表面に一層の皮殻を作り、地球尙ほ收縮するに従ひ外皮は更に十分收縮するの餘地なきを以て既に成りたる皮殻は皺襞を生ず此皺襞即山脈なり、地球上著名なる山

脈アルプス ヒマラヤ等の如きは皆此類に屬す、山脈既に成りて後其岩石の粗鬆なるもの並に空氣及水の作用によりて粗鬆となりたるものは崩壊して孤立せる峰巒を殘すの理より云ふときは耶馬溪の地如何に粗鬆なる皮殼と堅密なる皮殼とに依りて成りしやを推知すべきなり

○鳶巖 芝石巖の後背の岩を云ふ、洞穴あり藥師佛を安置す、二丁にして八木蔭又二丁にして

○龍鼻巖 隧道の岩を云ふ、此龍、頭部を此處に出し胴部を桃谷に置き、尾を森に延ばすと云ふ、三丁にして平原に至る

○七福巖あり 又七つ岩と云ふ、平原より三丁西方の谿に正列す、深瀬谿の一奇勝なり探勝者必ず杖を移すべき所とす

○小岳の舟石 平原の前、南北に長き山上にあり

○鍋の臺の甑岩 小岳の南方の山嶺を云ふ

○龍頂山龍源寺 東岸甑岩の麓にあり、寺前に蛇淵あり淵に辨才石あり、平原より三丁にして

○鳴良 此處は柿山村の内にして二三の小旅舎あり、深瀬谿と柿山村の入口に當る

○高平瀧 鳴良の西方に見ゆ、高さ五間、銀繩條落して一束の碎雨に似る

○鳴良小温泉 鳴良の東岸、銅金山の麓なる石罅より滾々湧出す温度甚だ高からずと雖も之を試味するときは必ず種々の薬味を混じ居るべきを覺ふ、然れども未だ之を分析して薬味

を調査せしものあらずと

○耶馬溪山の陰陽 深瀬谿及立羽田方面の山容は肌膚柔軟、細腰孌々として婦女の如く復た柿坂方面(本溪)の巖貌は、骨格隆峻として鬼男子の如し、是耶馬溪自ら陰陽の分ちあるものなる歟

○深瀬谿 (新耶馬溪)の峰容は千體萬狀、淺學之を形容するの辭を知らず、今便宜に従ひ芝石巖より深瀬谿の頂まで沝るの間、山峰其他の名稱を雅俗混淆順次左右に並列す看客之を對照して了得せられよ

○谷の河内臥龍梅 深瀬谿、鹿倉と云へる一二の孤店ある所より東貳拾丁に當る、樹周一丈四尺、幹枝蟠蜿すること約七

畝歩、花時遠近の雅客、山路の嶮惡を厭はず筈を曳き觀賞す
○天女橋 鹿倉峠頂上より六丁にあり此處は森地方より來れば右深瀬谿、左金吉谿に至るの岐路なり、二十五丁にして現
○森町 舊藩久留島氏(祿高一萬貳千五百石)の城下にして現今戸數約五百五十、玖珠郡役所所在地なり
○三島宮は壯嚴なる舊城趾、眺望絶佳の高邱にありて自ら森町の公園地となり居れり



耶馬溪案内記

一

柿坂かきざかより大島おほしまに至るいた

○祇園橋ぎわんはし 柿坂三つ辻ちやうより二丁ちやうにあり城井村しろのむらと下郷村さかひの界さかひをなす

○祇園洞ぎわんどう 祇園橋頭ぎわんはしづつにあり祇園社ぎわんしゃを祀まつる、八丁はちぢやうにして都留つるに至る向岸むかひがし、東西とうざいに蜿蜒えんげんたる山脈さんみやくあり山上更やまの上に一帯いちたいの碧嵩へきさんあり

○長蛇峰ながへびのねと云ふ 此長蛇このちやうだ、頭あたまを西端さいたんに露あらはし（沓掛菅公廟くわかけすげこうみやうより見ゆ）尾おしを杉畑すぎはたの北きたに置おくと云ふ

○硯石 長蛇峰の半巔にあり都留の人家ある所より見ゆ、其形蝦蟇の口を開きたるが如し、杉畑より五丁にして

○沓掛菅公廟 路上數十丈の上にあり境内梅櫻其他の花卉を培栽す、探勝者参して行厨を解くの好位置なり

○夫婦岩 菅公廟より西方に眼を放つときは長蛇峰頭の一方に兩個の奇岩聳立せるを指す

○樋山路淨真寺 菅公廟前より十丁にして瑞雲寺(地名)に至る淨真寺は瑞雲寺の向岸の山上にあり頼翁、雲華上人を伴ひ文政九年十二月十一日再び耶馬溪を探りて投宿せし山寺なり

戊寅臘月遊下毛宿淨真精舎戲寫併題 頼山陽
群山顧眄各多姿、石爲肌膚樹作衣、平昔評山似評色、

唯憐ニ清瘦ニ不憐レ肥

同ニ大舍上人ニ探ニ耶馬溪諸勝ニ有ニ此作ニ

酒貯ニ半瓢ニ紅滴瀝、山徑千嶂碧峻嶮、更欣一事尤難レ獲、復飲同遊有快僧

其明大雨又有レ作

寫レ山不厭雨覆盆、植杖探囊筆屢援、卻倩ニ同行ニ扶掣レ紙、笠檐餘滴暉生レ痕

○讓葉の蒸石 又重石と云ふ、樋山路の西一里餘にあり、二個の大奇石相重りて恰も蒸籠の如し下層の石上は潮水を湛へ

每朔日と十五日には外面に溢出すと云ふ
○大久保の松岳 は大島、大久保、樋山路、金吉、宮園の中

央にあり 伊勢大神宮を祀る、邱上千年を経たる數多の老松
鬱茂し八方の山容水色一眸に納り眺望絶佳なり、松岳より五
六丁にして

○大島雲輿橋 此處は地勢稍廣濶にして、村役場、登記所
小學校、雜貨店、旅館、人馬車駐車場等あり、橋上より東に
植代山、樋の口山、東の木山、鹿熊山、南に下城山、かまさ
山、北に松岳、雲押山、西に傘山等を望み四時の風光に富む
處とす、雲輿橋の名は、宮園雲八幡神を輿に載せ河を渡りた
るに因するものなりと云ふ

耶馬溪案内記

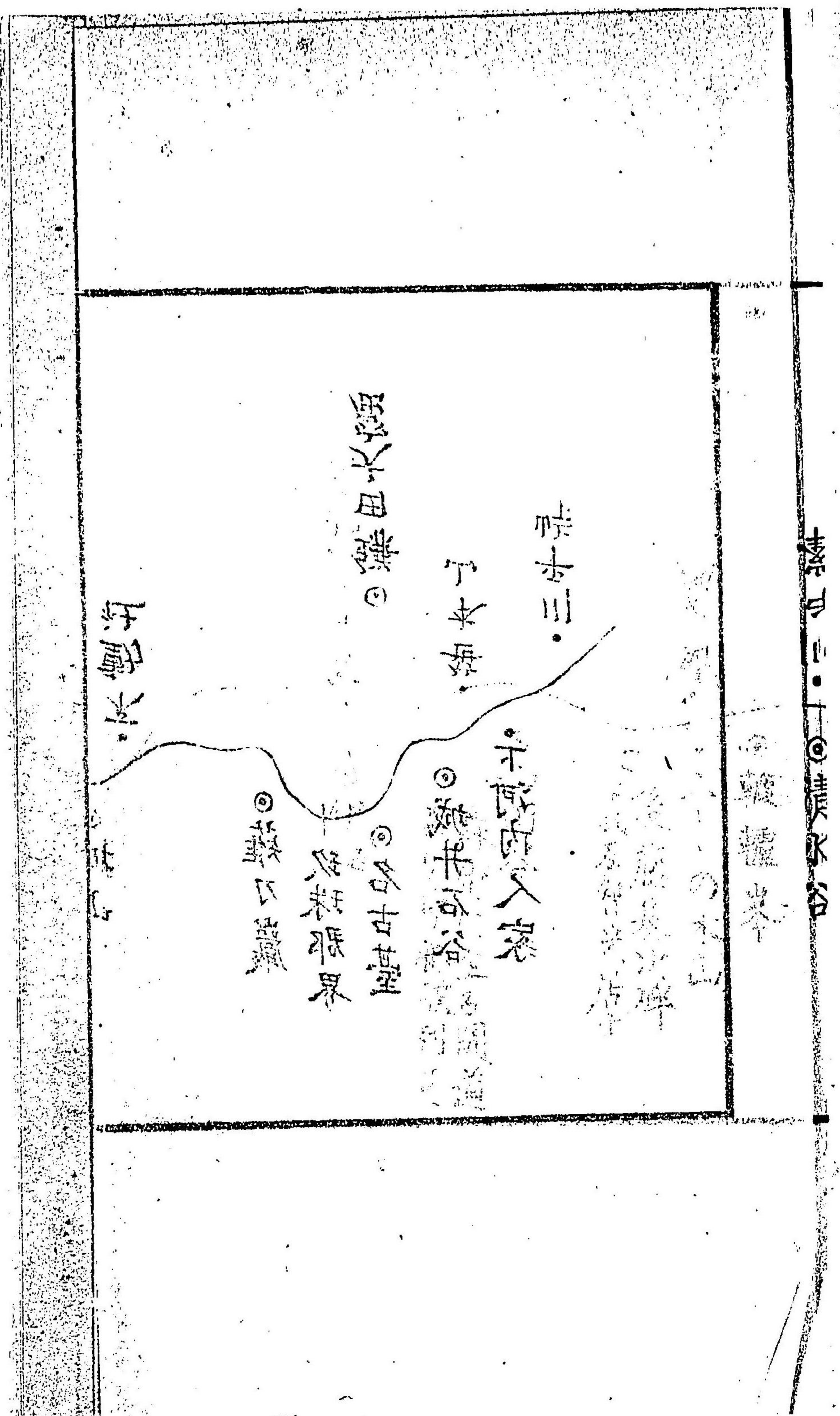
第六編

大島より伊福を経て森町に至る

緒言

○世人第三編の深瀬谿(新耶馬溪)の勝を喋々して本編伊福谷
の勝を談ずるもの少し蓋し深瀬谷は伊福谷に比し人馬の通行
頻繁、且つ中津方面より來て探勝するものは道程の便宜によ
り深瀬谷に遊んで伊福谷に遊ぶもの少し、又地方人之を知ら
ざるに非らざるも頼翁の詩句の如く看に慣るゝの行人渾て等

閑と云譯で其絶勝たるを世人に紹介するものなきによる、頼翁、日田より入り守實、柿坂を経て古城に至り雲華師と共に宇佐郡麻生の仙人巖に行き、羅漢寺を過ぎて再び柿坂地方に遊ぶや、耶馬溪圖卷之記を作りて廣く我國の名勝を引證し來りて海内第一と云へるもの單に自己の目撃する部分のみを云ふにあらずして其足跡の至らざる支谿も亦想像せるものなりと雖も惜むらくは九十年前、翁の來遊せる頃は伊福、深瀬の兩谿未だ道路開通せざりしことを、翁をして若し此兩谿を實地に瞥見せしめば其想像外の奇絶に駭嘆せられたるならん、今や明治の聖代に逢着し汽車汽船の便ある上、麋鹿猿群の外足跡のあらざりし此兩支谿も、車馬來往の道路開通し、親しく



丑

大分縣

東

・金吉峰眺山教四寺

・金吉の内奥江奥畑
及山移越山路

・中松峯

・宮尾峯 矢門台

・中尾峯

蛇形岩面に顕る

・山浦光四寺

・名古堂

・香栗岳

・七木峯

・祇園平山

・タブノ木山

・鼻山 提都留

・馬脊峯

・懸峯

・琵琶峯

・立石山

・日平峯

・兔垣峯

・清水谷

・轆轤峯

・ふしの木山

・後藤基次碑
義又智光居士

・山田谷

森町に至る間道
あり奇勝驢列を

・伊福

・城山

・不動社

・薙刀巖

・玖珠郡界

大分縣

大分縣

山浦光四寺

九素瑤

石亭

香栗岳

妙見素

七木峯

後山

祇園平山

山

夕ブノ木山

原素

鼻山提都留

城原素

馬脊峯

懸峯

桂懸素

琵琶峯

山

立石山

日平峯

川素

兔垣峯

清水谷

巖

轆轤峯

ふの木の山
後藤基次碑
義又智光居士

山田谷

森町に至る間道
あり奇勝驢列を

亭

伊福

社

城山

田大

名古堂

山

城井石谷

川

下河内人家

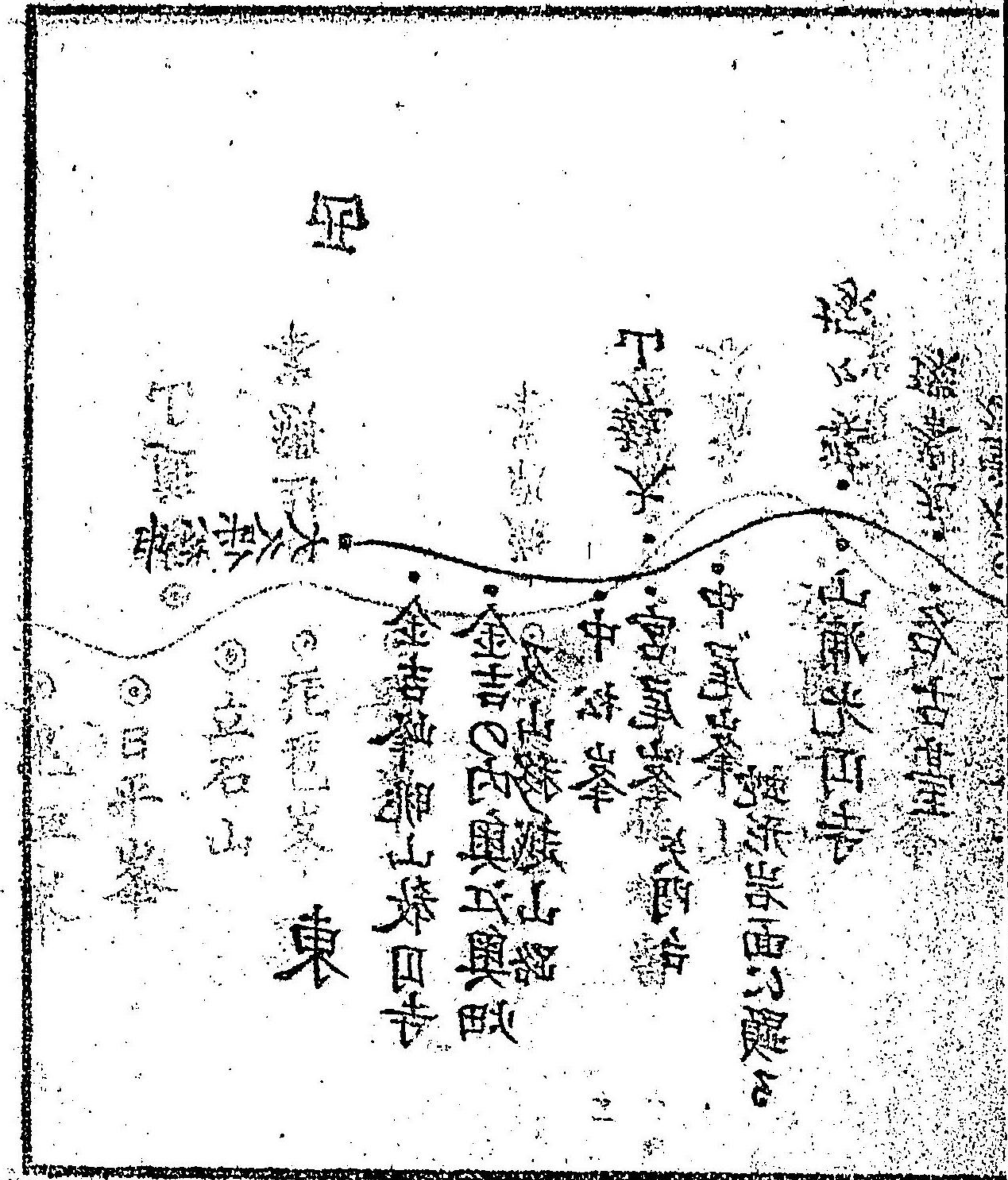
薙刀巖

一玖珠郡界

世人をして、海内第一の言、過賞にあらざるを知らしむるに至る、翁や地下に詩を賦し之を賀せんのみ

◎伊福谿の山貌又千姿萬態、一々之を説明すべからず、今便宜大久保松岳より、玖珠郡八幡村大字古後字下河口に至るの間は山峰其他の名稱を雅俗混淆の儘順次左右に並列すべし
○石堂谷に 源兵衛酒屋と名づけ忠僕源兵衛なる酒人の發見せし天然の酒泉ありと

○後藤基次碑 伊福にあり、基次、大阪籠城を逃るゝや中津に歸り、伊福の妾宅に潜居し、文字を兒童に教へて其日を送りしが、秀頼薩州に薨せしを聞き、大に落膽して再舉のなすべからざるを知り、一夜感狀、寶器を火きて燈下に自殺すと



云ふ伊福の石碑に義及智光居士と記し上に梵字あり銘に云居士俗名は又兵衛何處の人たるを知らず昔此村に來り寓居すること三年、其人となり志氣英威、武徳俊高、而して眼光人を射る、憶ふに諸侯大夫の世に逆ひ、而して適居するもの乎承應三年正月廿九日夜劍刃に自殺す、之に因て里人古を慕ひ新に石碑を建て冥福を資助す、寶曆十三癸未歲六月願主金吉村伊福茂助」と蓋是徳川氏を憚りて碑名を曖昧にせるなり

○鎌田の大窟 下河内より西凡そ十四五丁に當る、絶壁斷壑の下、大窟あり、昔鎌田隼人なるもの、住ひし處にして里人鎌田八幡と云へる小社を建たり、一説に土蜘蛛、耳垂の住ひし處と傳ふ、洞口は窄りて僅に一丈餘なれども、窟内は廣濶平坦にして約二百人を納るべし、又表面絶壁、木羅松叢の間數多の大老藤、空中に懸るあり

○立羽田峰 伊福線路、三大奇勝の一にして峰勢鳥の兩翼を張りて將に西飛するもの、狀を作す而して又其右翼を菅蒲巖と云ふ、澗水之を圍繞す、左翼の麓に八九の人家あり、大久保三里 森町二里十町

- 立羽田の八岩 一橋岩 二八間岩 三貝岩 四豊前坊岩 五窓岩 六姫岩 七伊勢岩 八白岩と云ふ
- 其他婆々岩、轉岩、馬岩などあり

○坂上峰 伊福線路三大奇勝の一にして谿の兩側に玲瓏たる無數の奇峯、紛錯林立す、中間に碧地あり、池中小島あり、

安政年間六十六部矢野萬吉なるもの來りて坂上及鶴原の岩壁に觀音の像、八十八個を彫刻す、伊福一里半、立羽田十六丁、鶴原へ東八丁、是より四五丁を下りて

○磐井堂 山下の内、山上玖珠八十八番の觀音を安置す、大洞あり面積四十疊、洞の高さ五間

○山下 此處より森町へ本道を行けば勝地を探ぐる能はず、故に山下より鶴原へ東十丁を経て天女橋通り山路を案内すべし

○鶴原 大字川底の内にあり、神工鬼斧、窈窕たる數百の奇岩突兀偃蹇、奇狀を競ふ、下に清池あり池内に小島あり舊藩主久留島家の妃女時々來て野遊を爲せりと云ふ

○神仙の有無 固と思議すべからずと雖も鶴原、坂上、立羽田の三絶境は、仙靈の託する所と云へること亦必ずしも誣ひざらなり、鶴原より南十三丁にして

○馬脊障子巖 大字太田の内にあり、山貌、坂の上に似る、十丁にして

○丸坪 に至る人家あり、東に鉾岩、唐人岩を望む、此方面は百谷越と云へる山移に出る舊道にして勝景又尠からず五丁にして天女橋又廿五丁にして森町に出づ



耶馬溪案內記

第七編

大島より中摩を經、羽高支谿を往復して
守實驛に至る

○大島より十丁にして、下郷村大字宮園の

○雲八幡宮に至る 傳記に云寶曆三年出現、柴の秀倉を建つ
圓融帝の御宇 一品舍人親王の御孫、肥後守道惟卿の嫡男、
少納言清原政高朝臣、天延元年清淨の靈地を撰び遷し奉るべ
しとして寶殿を唐笠山の麓、旭川の川上に遷し祭りき

正殿 雲八幡宮 左殿 妙見宮 右殿 大行司宮
境内に雲石、雲水、雲の杜、旭川、御面影の池、三韓笠山などあり

雲の杜

夫木集知家

村雨のけさもゆき、の雲の杜幾度あきの木末そむらん
御面影の池 長宣の靈夢

池水にうつす影こそ我すがたすなほにもてよ己がこゝろを

祭日舊六月十八日十九日同十一月初寅卯

雲八幡社より六丁隧道を経て

〇一戸の妙見嶽 山上、鳶城と云へる城趾あり、慶長の頃、

荒川少兵衛和光の居し處、其地は舊宿驛にて旅館人車等あり

〇一戸橋頭 太神宮、路上、一の垂松あり境域高く溪流に臨み嚮ひに庄屋村の屏風岩を望む

〇縣下第一の大杉 は庄屋村鎮守神社内にあり周圍四丈四尺

餘ありと云ふ、一戸橋より隧道を経て

〇神谷橋 此小谿を神谷、室宮谷と云ふ、人家數百あり勝景

又少なからず、數丁にして

〇竹淵の紅葉 道路より數十仞の下に蒼然たる深淵あり、淵

上紅葉林斷續す、秋霜、襲ひ來りて、葉も花の如く亂紅を闘

はし飛で空中に翔り水に映じ川に流れて錦繡を織る

〇路傍の清泉 竹淵の上を田郎丸といふ路傍二三丁を隔て、

雌雄の小清泉、冷々竇間より出づ、大旱涸れず泉味清冽、一

掬齒を慰す、二三丁にして肥前屋に入らんとするとき路右に
○虎頭巖 聳立す、形容、名稱に似る。

河向ひの茂林中に
○龜山神社 あり、山名を龜峰、地名を白地と云ふ
○肥前屋 は故村山姑南翁の住地にして旅舎、雜貨店等あり
一二丁にして中摩の

○天神橋 に至る此處は南より本流、右より田野尾川、左より
春田川の三流相會し橋畔最も眺望に富む

○羽高の支谿は 天神橋より入るを順路とするに依り之より
羽高谿を案内し終て天神橋に立歸り更に本溪を案内すべし
○鷹巢山 天神橋より西、田野川に添ひ浜ること三十丁嶮惡

なる坂路の一橋を過ぎ中詰といへる地を經、羽高に至り初め
て此山を觀る、其斷壁に蒼鷹、巢を結び其形、月輪の如し、
十八丁にして

○京石 耶馬溪八石の一にして上下二岩より成り玲瓏たる美
貌雲霄に蹲立し恰も天主堂の觀を呈す

之れより岩伏に至り火桶山、鐘山の間を過ぐれば谿路二あり
下りて橋を渡り又右へ荆棘の中に入る一丁餘にして

○仙人巖 左に姑南翁の遊記文を収録す

遊仙人巖記

村上 姑南

遊之最樂者、必出於偶然、苟有所期則或爲之生憾也、
而樂者非經艱苦則亦不能得矣、遊也期日伴也約人、

若其日迅雷風烈其人_不來所以期_樂卻爲_憾也、探_驪珠於_淵底、得_虎兒於_穴中、豈安坐之可_得乎、予嘗遊_羽高、人曰距此咫尺、有_稱天岩戶者_極奇、夫子不_欲觀_之乎、予曰往亦不_妨、乃使_人導誘、遂探_其勝、巖成_梁、高_架數十仞上、予曰是天然巖成_橋者、當_呼天巖橋_而已、其呼_岩戶者俗謬矣、後語_之旭莊先生、先生曰、果然乎宜_號仙人梁、仙客或往來焉耳、決非_俗兒之可_攀也於_是乎得_{仙人}巖名_云、今茲文久壬戌初冬念九、朗廬阪谷子_從一門生_飄然來訪_旭莊先生、附_東曰、此人家備、專_名於山陽道_至則宜_誘彼仙巖_也、乃相伴而出、時方午牌、此遊實出_於偶然、節雖屬冬、雲晴風收暄暖可

愛、一路沿_溪而入、過_田野尾、中詰、羽高_到池原_左折入_山、一步險_{一步}、荆棘鉤_衣、磊砢_足趾、側_身而上、須臾忽見_{仙人}梁於_天邊、予嘗遊也、在_去歲暮春、林樹蒼鬱或妨_矚目、今葉盡枝枯、無_霧無_靄、將龍耶蟠勢可望、將虹耶橫影可仰、不_覺同聲呼_妙、而二客過_梁下_而躋攀、予以_{肥胖}故_不能_同行、恰如_學仙者他皆得_乘雲御_風而我獨俗緣不_脫猶在_下地也、予戲曰、此區予爲_門山上人_而不_能上_其山者果何因緣、二客顧盼、三人同笑、既而唯聞_登音在_雲外、而不_見其人_矣、下來乃曰、過_彼而行數百步、有_巖洞、可_以坐_{數十}人者、岩戶之名蓋取_此乎、俗言亦不_全無_謂也、少_焉夕日方

沒影猶閃峰背、柄鴉既歸、聲齊喧林際、雲之白擁山、風之冷拂衣、促歸到羽高、晚炊將熟、炬火點塗、戍牌歸家、賓主各就席焉、予謂阪谷子曰、造物之所爲何其多僻也、如彼奇狀、設之於都會、則文人詩客、絡繹遊觀巖名必藉甚、而却兀立於無人境、玩之者非猿則鹿、蓋亦非有意也、然而予嘗遊、似客於相接、以樹葉自掩而今日使君飽觀其奇貌、欲待君之椽筆、鳴名於天下乎、豈可謂偶然乎、雖然今日之遊、不期伴文辭之客、不期而遇快晴之日、巖之全形、不期而觀之君之健筆、不期而傳之、則天下之騷客來探者、將接踵而至、果然則與在都會之地無異也、皆莫不出於偶然也、豈可以預

期而襲得乎、然非經攀嶮踏危之苦、則不可得焉、予先屬苦澁難讀之文者、亦自隗始之意也、而後甘美流暢、可供其樂者、陸續相至而已、阪谷子曰予亦尋記予先記

阪谷朗廬曰、仙人巖一勝已驚於昨日、佳記一篇又驚於今日、畢竟仙客狡獪手段、不可測識也

案内者曰阪谷子の記文其之れ有るを聞けども憾らしくは其所在を發見せず、多分三郷村の舊家に散逸し居るならん識者請ふ觀光者のため之を示せ、又姑南翁の前記文は他人の再三轉寫せしものに案内者の句讀を施したるものなれば誤謬なきを保せず看官之れを諒とせよ